

環境省自然環境局野生生物課 希少種保全推進室 編

環境省レッドリスト 2017 補遺資料

Addendum: Red List 2017 on Ministry of the Environment, Government of Japan.

はじめに

「環境省レッドリスト 2017 補遺資料」は、平成 29 年 3 月に公表された「レッドリスト 2017」において新規に掲載された種(亜種、変種等を含む、以下同じ)及びカテゴリーが変更された種を対象に、それらの評価理由や生息状況等を簡潔に解説したものです。

すでに刊行されている各分類群のレッドデータブック 2014 と合わせて、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く活用されることが望まれます。

レッドリスト 2017 の詳細については、以下の環境省ホームページを参照してください。

<http://www.env.go.jp/nature/kisho/hozen/redlist/index.html>

環境省では、平成 27 年度よりレッドリストの随時見直しを行っております。第 4 次レッドリストを平成 24 年度に公表して以降、第 1 回目随時見直しとして平成 27 年 9 月にレッドリスト 2015 を公表し、今回が第 2 回目となります。随時見直しにおける評価対象は、「近年の情報から減少が確認され、早急なカテゴリー変更が必要となる種」、あるいは、「新種記載等の分類学的な最新知見に基づき新種の追加や既存掲載種の分離・統合が生じ、早急に評価が必要と判断された種」等です。

また、レッドリスト 2017 より、全分類群を対象とした定量的要件を用いた絶滅危惧の評価も併せて開始しました。そのため、今まで定性的要件により絶滅危惧を評価(CR+EN, VU)していた分類群(貝類、その他無脊椎動物、蘚苔類、藻類、地衣類、菌類)については、随時見直しにより評価した種に限って定量的要件による評価(CR, EN, VU)が行われており、両評価方法が混在した状態にあります。なお、随時見直しによる評価が必要ない種については、第 5 次レッドリストの作成時に再評価する予定です。

解説内容

レッドリスト 2017 に新たに掲載された 35 種、カテゴリーが再評価された 25 種(うち 4 種はレッドリストから

削除)について、以下の内容を簡潔に解説しました。なお、哺乳類、蘚苔類、地衣類、菌類については、レッドリスト 2017 において評価した種はありませんでした。

また、カテゴリー変更を行った種については、基礎情報がレッドデータブック 2014 に掲載されていることから、大きな変更がない場合は基本的には省略し(貝類の NT, DD 種他を除く)、リストから削除した種については、削除理由のみを掲載しています。

【掲載項目】

- カテゴリー区分(新旧)
- 分類群名(目名、科名等)
- 標準和名
- 学名、命名者名、命名年
- カテゴリー判定基準
- 日本における固有性
- 基礎情報
評価種の形態、生態、分布等の基本的な情報等を記載
- 随時見直しの評価理由
随時見直しにより評価を行った理由及び種の現状等を記載
- 存続を脅かす要因
- 執筆者(所属)

執筆

執筆はつぎの方々、団体にお願ひし、執筆者名を種ごとの記載の末尾に明記しました。

梶田学	松井正文	久保弘文
茂田良光	金尾滋史	佐々木哲朗
齋藤武馬	前田 健	島野智之
矢部 隆	中村康弘	日本植物分類学会
戸田光彦	矢後勝也	(敬称略、掲載順)
疋田 努	福田 宏	
西川完途	亀田勇一	
吉川夏彦	早瀬善正	

レッドリスト見直しの経緯と検討体制

○ 見直しの経緯

野生生物の保全のためには、絶滅のおそれのある種を的確に把握し、一般への理解を広める必要があることから、環境省では、昭和 61 年度より「緊急に保護を要する動植物の種の選定調査」を行った。その結果を踏まえ、動物については平成 3 年に環境省版レッドデータブック「日本の絶滅のおそれのある野生生物－脊椎動物編」及び「日本の絶滅のおそれのある野生生物－無脊椎動物編」を取りまとめた（レッドデータブックとは、レッドリストに基づき生息状況等を取りまとめ編纂した書物である。）。

平成 7 年度には国際自然保護連合（IUCN）で採択された新しいカテゴリー（ランク）の考え方を踏まえて、動物についてはレッドリストの見直し、植物については新たに選定に着手し、動物では①哺乳類 ②鳥類 ③爬虫類 ④両生類 ⑤汽水・淡水魚類 ⑥昆虫類 ⑦貝類 ⑧その他無脊椎動物（クモ形類、甲殻類等）、植物では⑨植物Ⅰ（維管束植物）及び⑩植物Ⅱ（維管束植物以外：蘚苔類、藻類、地衣類、菌類）の 10 分類群ごとに、平成 9 年度～12 年度にかけて順次レッドリストを公表した（動物については 2 回目、植物については初めての公表）。

また、このレッドリストを元に、分類群ごとのレッドデータブックを平成 12 年度～18 年度に発行した。

平成 14 年度より 2 回目のレッドリストの見直し作業に着手し、平成 18 年 12 月に鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物の 4 分類群、平成 19 年 8 月に残りの哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ（維管束植物）及び植物Ⅱ（維管束植物以外）の 6 分類群のレッドリストを公表した（動物については 3 回目、植物については 2 回目の公表）。

新たにレッドリストに掲載された種や、カテゴリーが変更された種については、現行レッドデータブックの付属説明資料を作成した。

平成 20 年度より 3 回目のレッドリスト見直し作業に着手し、平成 24 年 8 月に汽水・淡水魚類を除く 9 分類群、平成 25 年 2 月に汽水・淡水魚類のレッドリストを公表した（動物については 4 回目、植物については 3 回目の公表）。

また、この第 4 次レッドリストを元に、分類群ごとのレッドデータブックを平成 26 年度に発行した。

平成 27 年度からは、生息状況の悪化等によりカテゴリーの再検討が必要な種については、時期を定めず必要に応じて個別に随時見直しを行うこととしており、平成 27 年 9 月にレッドリスト 2015 を公表している。

○検討体制

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会の下に分類群毎に分科会を置いて検討を行った。検討員については以下のとおり。(50 音順、◎は座長、所属は平成 29 年 10 月時点)

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 検討員

- 石井 信夫 東京女子大学現代教養学部 教授
◎石井 実 大阪府立大学 理事
尾崎 清明 山階鳥類研究所 副所長
柏谷 博之 国立科学博物館 名誉研究員
角野 康郎 神戸大学大学院理学研究科 教授
近藤 高貴 大阪教育大学 名誉教授
布村 昇 金沢大学環日本海域環境研究センター 連携研究員
細谷 和海 近畿大学大学院農学研究科 教授
松井 正文 京都大学 名誉教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 哺乳類分科会

- ◎石井 信夫 東京女子大学現代教養学部 教授
押田 龍夫 帯広畜産大学環境農学研究部門環境生態学分野 教授
佐野 明 三重県伊賀農林事務所森林・林業室 副参事兼林業振興課長
中川 元 元斜里町立知床博物館 館長
横畑 泰志 富山大学大学院理工学研究部理学領域 教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 鳥類分科会

- 植田 睦之 バードリサーチ 代表
◎尾崎 清明 山階鳥類研究所 副所長
金井 裕 日本野鳥の会 参与
玉田 克巳 北海道立総合研究機構環境・地質研究本部環境科学研究センター 主査
永田 尚志 新潟大学朱鷺・自然再生学研究センター 教授
新妻 靖章 名城大学農学部 教授
西海 功 国立科学博物館動物研究部 研究主幹

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 爬虫類・両生類分科会

- 太田 英利 兵庫県立大学自然・環境科学研究所 教授
竹中 践 東海大学生物学部 特任教授
戸田 守 琉球大学熱帯生物圏研究センター 准教授
福山 欣司 慶應義塾大学経済学部 教授
◎松井 正文 京都大学 名誉教授

◆絶滅のおそれのある野生生物種の選定・評価検討会 汽水・淡水魚類分科会

- 乾 隆帝 山口大学大学院創成科学研究科 特命助教
小泉 逸郎 北海道大学地球環境科学研究院 准教授
小早川 みどり 日本魚類学会 会員
清水 孝昭 愛媛県農林水産研究所水産研究センター栽培資源研究所 担当係長
鈴木 寿之 兵庫県立川西緑台高等学校 教諭
立原 一憲 琉球大学理学部海洋自然科学科 准教授
◎細谷 和海 近畿大学大学院農学研究科 教授
前田 健 沖縄科学技術大学院大学 スタッフサイエンティスト
前畑 政善 神戸学院大学人文学部 教授
渡辺 勝敏 京都大学大学院理学研究科 准教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 昆虫類分科会

- 荒谷 邦雄 九州大学大学院比較社会文化研究院 教授
◎石井 実 大阪府立大学 理事
大原 賢二 元徳島県立博物館 館長
苅部 治紀 神奈川県立生命の星・地球博物館 主任学芸員
岸田 泰則 日本蛾類学会 会長
北野 忠 東海大学教養学部 教授
神保 宇嗣 国立科学博物館動物研究部 研究主幹
多田内 修 九州大学 名誉教授
林 正美 埼玉大学 名誉教授
丸山 宗利 九州大学総合研究博物館 助教
矢後 勝也 東京大学総合研究博物館 助教

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 貝類分科会

- 岩崎 敬二 奈良大学教養部 教授
亀田 勇一 国立科学博物館分子生物多様性研究資料センター 研究員
木村 妙子 三重大学大学院生物資源学研究科 准教授
久保 弘文 沖縄県水産海洋技術センター 班長
◎近藤 高貴 大阪教育大学 名誉教授
早瀬 善正 株式会社東海アクアノーツ
福田 宏 岡山大学大学院環境生命科学研究科 准教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 その他無脊椎動物分科会

- 石井 清 昭和大学富士吉田教育部 客員教授
大高 明史 弘前大学教育学部 教授
駒井 智幸 千葉県立中央博物館 主任上席研究員

- 佐藤 英文 東京家政大学家政学部 准教授
 島野 智之 法政大学自然科学センター/国際文化学部 教授
 谷川 明男 東京大学大学院農学生命科学研究科 農学特定支援員
 鶴崎 展巨 鳥取大学農学部生命環境農学科 教授
 富川 光 広島大学大学院教育学研究科 准教授
 並河 洋 国立科学博物館動物研究部 研究主幹
 成瀬 貫 琉球大学熱帯生物圏研究センター西表研究施設 准教授
 ◎布村 昇 金沢大学環日本海域環境研究センター 連携研究員

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 維管束植物分科会

- 伊藤 元己 東京大学大学院総合文化研究科 教授
 海老原 淳 国立科学博物館植物研究部 研究主幹
 勝山 輝男 神奈川県立生命の星・地球博物館 学芸員
 ◎角野 康郎 神戸大学大学院理学研究科 教授
 黒沢 高秀 福島大学共生システム理工学類 教授
 高橋 英樹 北海道大学総合博物館 特任教授
 高宮 正之 熊本大学大学院先端科学研究部 教授
 藤井 伸二 人間環境大学人間環境学部 准教授
 矢原 徹一 九州大学大学院理学研究院 教授
 横田 昌嗣 琉球大学理学部海洋自然科学科 教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 蘚苔類・藻類・地衣類・菌類分科会

蘚苔類

- 長谷川 二郎 南九州大学教養教職センター 教授
 樋口 正信 国立科学博物館植物研究部 部長
 古木 達郎 千葉県立中央博物館 自然誌・歴史研究部長
 山口 富美夫 広島大学大学院理学研究科 教授

藻類

- 神谷 充伸 福井県立大学海洋生物資源学部 教授
 北山 太樹 国立科学博物館植物研究部 研究主幹
 坂山 英俊 神戸大学大学院理学研究科 准教授
 田中 次郎 東京海洋大学 名誉教授
 寺田 竜太 鹿児島大学大学院連合農学研究科 教授

地衣類

- 井上 正鉄 秋田大学 名誉教授
 大村 嘉人 国立科学博物館植物研究部 研究主幹
 ◎柏谷 博之 国立科学博物館 名誉研究員

宮脇 博巳 佐賀大学教育学部 教授
吉田 考造 元埼玉県立自然の博物館 学芸員

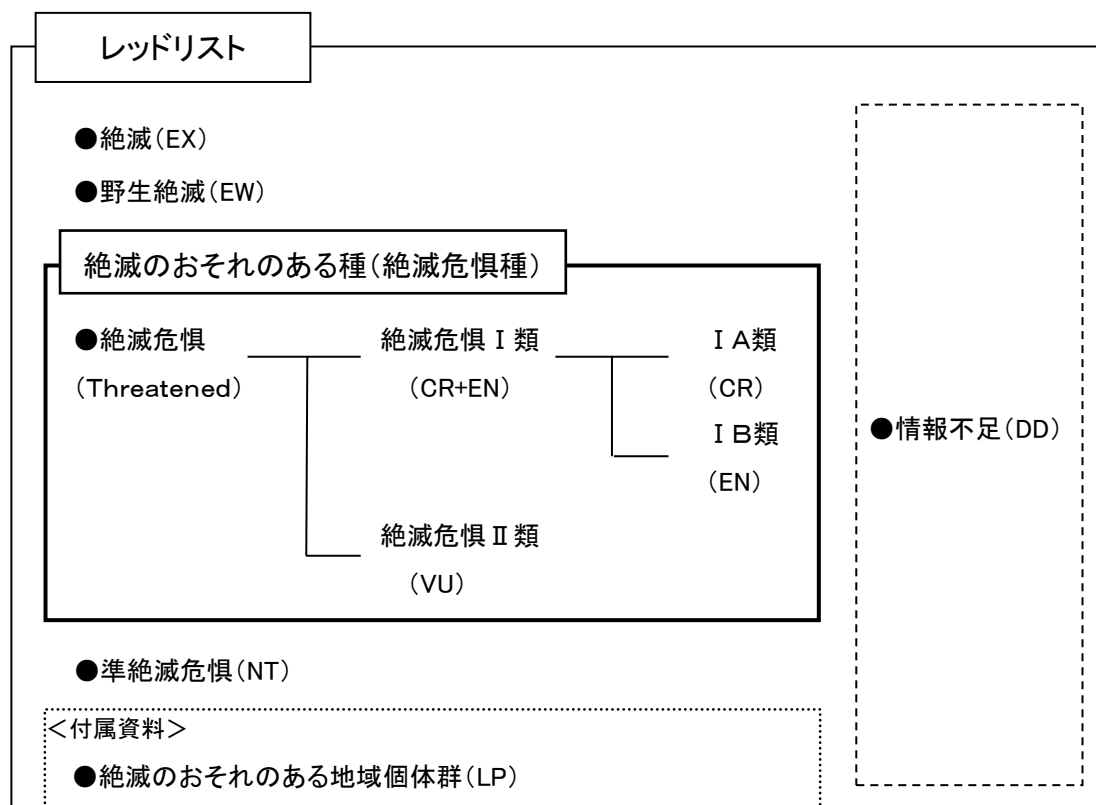
菌類

糟谷大河 千葉科学大学危機管理学部 講師
服部 力 森林総合研究所きのこ・森林微生物研究領域 森林病理研究室長
吹春俊光 千葉県立中央博物館環境教育研究科 植物学研究科長
保坂健太郎 国立科学博物館植物研究部 研究主幹
細矢 剛 国立科学博物館植物研究部 菌類・藻類研究グループ長

環境省レッドリストカテゴリーと判定基準（2017）

【カテゴリー（ランク）】

今回のレッドリスト見直しに際して用いたカテゴリーは下記のとおりであり、第4次レッドリスト（2012、2013）やレッドリスト2015で使用されているカテゴリーと同一である。



【判定基準】

2001年にIUCN（国際自然保護連合）が新たな数値基準を採用した「IUCNレッドリストカテゴリーと基準」*1を発行したことを受けて、第3次レッドリスト作成時にカテゴリーの判定基準の一部変更を行い、第4次レッドリストやレッドリスト2015作成時も同様の判定基準を用いた。今回の見直しにおいても第4次レッドリストの判定基準を踏襲して、各対象種の評価を実施した。判定基準の詳細については、次ページ以降に示すとおりである。

また、数値基準による評価が可能となるようなデータが得られない種も多いことから、第4次リストで用いてきたものと同様に、「定性的要件」と「定量的要件(数値基準)」を併用するが、原則として、随時見直しを行う種については、「定量的要件」を適用することとした。なお、「定性的要件」と「定量的要件」は、必ずしも厳密な対応関係にあるわけではないが、現時点では併用が最善との結論に至ったものである。

*1 IUCN (2001) IUCN Red List Categories and Criteria: Version 3.1. IUCN Species Survival Commission. Gland, Switzerland and Cambridge, U.K.

■ カテゴリー（ランク）と判定基準

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>絶滅 Extinct (EX) 我が国ではすでに絶滅したと考えられる種(注1.以下同じ)</p>	<p>過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種</p>	
<p>野生絶滅 Extinct in the Wild (EW) 飼育・栽培下でのみ存続している種</p>	<p>過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下では存続しているが、我が国において野生ではすでに絶滅したと考えられる種</p> <p>【確実な情報があるもの】</p> <p>①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。</p> <p>②信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。</p> <p>【情報量が少ないもの】</p> <p>③過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。</p>	
<p>絶滅危惧 I 類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN) 絶滅の危機に瀕している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。</p> <p>T H R E A T E N E D</p>	<p>次のいずれかに該当する種</p> <p>【確実な情報があるもの】</p> <p>①既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。</p> <p>②既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。</p> <p>③既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。</p> <p>④ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。</p> <p>【情報量が少ないもの】</p> <p>⑤それほど遠くない過去(30年～50年)の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。</p>	<p>絶滅危惧 I A 類 Critically Endangered (CR)</p> <p>ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。</p> <p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。</p> <p>1. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間(注2.以下同じ)を通じて、90%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、且つ理解されており、且つ明らかに可逆的である。</p> <p>2. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。</p> <p>3. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長期間を通じて、80%以上の減少があると予測される。</p> <p>4. 過去と未来の両方を含む10年間もしくは3世代のどちらか長い期間において80%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。</p> <p>B. 出現範囲が100km²未満もしくは生息地面積が10km²未満であると推定されるほか、次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。</p> <p>1. 生息地が過度に分断されているか、ただ1カ所の地点に限定されている。</p> <p>2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継続的な減少が予測される。</p> <p>3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。</p>

(注1)種:動物では種及び亜種、植物では種、亜種及び変種(一部に品種を含む)を示す。

(注2)過去10年間もしくは3世代:1世代が短く3世代に要する期間が10年未満のものは年数を、1世代が長く3世代に要する期間が10年を超えるものは世代数を採用する。

■ カテゴリー（ランク）と判定基準

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>絶滅危惧 I 類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN) 絶滅の危機に瀕している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">絶滅危惧 T H R E A T E N E D</p>		<p>絶滅危惧 I A 類 Critically Endangered (CR)</p> <p>ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。</p> <p>C. 個体群の成熟個体数が250未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 3年間もしくは1世代のどちらか長い期間に25%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> a) 個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> i) 50以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 ii) 1つの下位個体群中に90%以上の成熟個体が属している。 b) 成熟個体数の極度の減少 <p>D. 成熟個体数が50未満であると推定される個体群である場合。</p> <p>E. 数量解析により、10年間、もしくは3世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が50%以上と予測される場合。</p>
		<p>絶滅危惧 I B 類 Endangered (EN)</p> <p>I A類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。</p> <p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、70%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、且つ理解されており、且つ明らかに可逆的である。 2. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、あるいは可逆的でない。 3. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長期間を通じて、50%以上の減少があると予測される。 4. 過去と未来の両方を含む10年間もしくは3世代のどちらか長い期間において50%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 <p>B. 出現範囲が5,000km²未満もしくは生息地面積が500km²未満であると推定されるほか、次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生息地が過度に分断されているか、5以下の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。

■ カテゴリー（ランク）と判定基準

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">絶滅危惧</p> <p>絶滅危惧 I 類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN) 絶滅の危機に瀕している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。</p>		<p>絶滅危惧 I B 類 Endangered (EN)</p> <p>I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。</p> <p>C. 個体群の成熟個体数が2,500未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 5年間もしくは2世代のどちらか長い期間に20%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> a) 個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> i) 250以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 ii) 1つの下位個体群中に95%以上の成熟個体が属している。 b) 成熟個体数の極度の減少 <p>D. 成熟個体数が250未満であると推定される個体群である場合。</p> <p>E. 数量解析により、20年間、もしくは5世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が20%以上と予測される場合。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">T H R E A T E N E D</p> <p>絶滅危惧 II 類 Vulnerable (VU) 絶滅の危険が増大している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する種</p> <p>【確実な情報があるもの】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ② 大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。 ③ 大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ 分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。 	<p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、且つ理解されており、且つ明らかに可逆的である。 2. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 3. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長期間を通じて、30%以上の減少があると予測される。 4. 過去と未来の両方を含む10年間もしくは3世代のどちらか長い期間において30%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 <p>B. 出現範囲が20,000km²未満もしくは生息地面積が2,000km²未満であると推定され、また次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生息地が過度に分断されているか、10以下の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等について、継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。

■ カテゴリー（ランク）と判定基準

カテゴリー及び基本概念		定性的要件	定量的要件
絶滅危惧	<p>絶滅危惧Ⅱ類 Vulnerable (VU) 絶滅の危険が増大している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの。</p>		<p>C. 個体群の成熟個体数が10,000未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 10年間もしくは3世代のどちらか長い期間に10%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> a) 個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> i) 1,000以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 ii) 1つの下位個体群中にすべての成熟個体が属している。 b) 成熟個体数の極度の減少 <p>D. 個体群が極めて小さく、成熟個体数が1,000未満と推定されるか、生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている場合。</p> <p>E. 数量解析により、100年間における絶滅の可能性が10%以上と予測される場合。</p>
	<p>準絶滅危惧 Near Threatened (NT) 存続基盤が脆弱な種</p> <p>現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリーに移行する要素を有するもの。</p>	<p>次に該当する種</p> <p>生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。</p> <ol style="list-style-type: none"> a) 個体数が減少している。 b) 生息条件が悪化している。 c) 過度の捕獲・採取による圧迫を受けている。 d) 交雑可能な別種が侵入している。 	
	<p>情報不足 Data Deficient (DD) 評価するだけの情報が不足している種</p>	<p>次に該当する種</p> <p>環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性(具体的には、次のいずれかの要素)を有しているが、生息状況をはじめとして、カテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。</p> <ol style="list-style-type: none"> a) どの生息地においても生息密度が低く希少である。 b) 生息地が局限されている。 c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。 d) 生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。 	

■ 付属資料

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>絶滅のおそれのある 地域個体群 Threatened Local Population (LP)</p> <p>地域的に孤立している個体群 で、絶滅のおそれが高いもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する地域個体群</p> <p>①生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される種の地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルで見た場合絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの。</p> <p>②地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。</p>	

【鳥 類】

■補遺資料掲載種一覧

※RL2017 カテゴリーごとに、学名アルファベット順に掲載

和名		学名		RL カテゴリー	
RL2015 (旧)	RL2017	RL2015 (旧)	RL2017	2015	2017
ダイトウウグイス	ダイトウウグイス	<i>Cettia diphone restricta</i>	<i>Cettia diphone restricta</i>	EX/DD*	DD
—	リュウキュウキビタキ	—	<i>Ficedula narcissina owstoni</i>	—	DD
—	オオムシクイ	—	<i>Phylloscopus examinandus</i>	—	DD
ウグイスの1亜種	削除	<i>Cettia diphone</i> ssp.	削除	DD	削除

※ウグイスの1亜種は、ダイトウウグイスと同亜種と判断されたため統合して再評価

DD

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : EX/DD (種統合による再評価)

スズメ目 ウグイス科

【鳥類】

ダイトウウグイス

日本固有亜種

Cettia diphone restricta Kuroda, 1923

カテゴリー判定基準: b) c)

基礎情報

1922年に南大東島で採集され、他地域の個体群と形態的に異なることが明らかとなり、1923年に新種として記載された。記載に使用された標本の産地は沖縄県南大東村。採集年以降、生息が確認されず、絶滅したと考えられていた。その後、2002年に沖縄島などに同一形態の個体群が生息していることが確認され、第4次レッドリストでは「ウグイスの1亜種」として評価された。その後、ダイトウウグイスとウグイスの1亜種が同じ亜種と判断されたことに基づき、レッドリスト2017では2亜種を統合して「ダイトウウグイス」として再評価を行った。

現在までに、繁殖期の分布が確認されたのは、沖縄島、喜界島、久米島のみと局限されており、本邦産ウグイスの亜種中では最も分布域が小さいものの一つである。主な生息環境は、リュウキュウチクの林や、伐採後地などのススキ原、倒木や枯死木の周辺にできるパッチ状の低木層などである。過去に分布していたとされる南大東島では絶滅して、現在は他の亜種が生息している。沖縄島の属島や与論島など種ウグイスの生息が確認されている島は他にもあるが、亜種の確認はされていない。具体的な個体数推定や生息密度の調査結果はない。

随時見直しの評価理由

本亜種は、過去に唯一の生息地として知られていた南大東島では原因が明らかにならないまま絶滅しており、絶滅(EX)カテゴリーに含められていたが、2002年に沖縄島から同一形態の個体群が発見された。沖縄島などでの個体数や生息密度の状況は現在も明らかになっていない。第4次レッドリストでは、日本鳥類目録改訂第6版(2000年発行)の分類を基準として掲載種、亜種の名称を規定していたため、この目録に未掲載であった沖縄島の個体群を「ウグイスの1亜種」として亜種ダイトウウグイスとは別個に掲載し、亜種ダイトウウグイスは絶滅(EX)カテゴリーのままとした。その後、2012年発行の日本鳥類目録改訂第7版では、両個体群が同亜種と判断され、沖縄島が亜種ダイトウウグイスの新たに確認された生息地として掲載されるとともに、絶滅は撤回された。これに伴いレッドリストの随時見直しによる早急な検討が必要であると考えられた。

存続を脅かす要因 捕食(外来種による)(52-3) 遷移進行・植生変化(54)

執筆者: 梶田学

DD

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

スズメ目 ヒタキ科

【鳥類】

リュウキュウキビタキ

Ficedula narcissina owstoni (Bangs, 1901)

カテゴリー判定基準: a) b) c) d)

基礎情報

本亜種の命名標本の産地は沖縄県石垣島である。キビタキに似るが、全長130~140mmのキビタキより小さく、全長121~126mm。頭上から背にかけてオリーブ色がかり、雄では小雨覆が青灰色を帯びる。喉はオレンジ色味はほとんどなく、黄色である。主な生息環境は良好な常緑広葉樹林とされ、昆虫類、節足動物等を捕食し、時々空中捕食や地上採食もするとされる。

日本では、鹿児島県と沖縄県の島嶼にのみ分布する。繁殖分布の南限は西表島、北限は鹿児島県三島村の大隅諸島の黒島・種子島・屋久島である。各生息地の正確な生息個体数は把握されていない。

随時見直しの評価理由

本種は、本邦産亜種キビタキとの個体群間で別種と同等以上の深い遺伝的分岐があることが報告された(Saitoh et al., 2014)。また、最新の研究では、形態・音声・遺伝子解析により、キビタキとは別種 *Ficedula owstoni* と考えられるようになった(Dong et al., 2015)。

本種の生息域は鹿児島県と沖縄県に局限されており、本邦産ヒタキ類の中では最も分布域が小さいものの一つである。個体数は分布域のどこでも少なく、渡りや移動についてもよく知られていない。

同時に生息地では森林伐採等の生息環境の悪化も進んでおり、絶滅の危険性が增大し続けている。かつては野鳥飼育のマニアによる捕獲も脅威となっていた。第4次レッドリストでは本亜種を含むキビタキ(広義)は絶滅の危険度が低いとされ、本亜種を対象とした評価が行われていなかったため未掲載種となっている。このため、随時見直しによる早急な検討が必要であると考えられた。

存続を脅かす要因 不明(99)

執筆者: 茂田良光(公益財団法人山階鳥類研究所)

DD

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

スズメ目 ムシクイ科

【鳥類】

オオムシクイ

Phylloscopus examinandus Stresemann, 1913

カテゴリー判定基準 : b)

基礎情報

従来は、種メボソムシクイの一亜種 *Phylloscopus borealis examinandus* とされてきたが、種内の分類の再検討を行ったところ、他地域の個体群と大きく遺伝的・形態的・音声の形質が異なることが明らかとなり、2011 年に別種として記載された(Alström et al., 2011)。

分類を行う上でその証拠となる標本(タイプ標本)の採集地はインドネシアのバリ島(記載年 1913)。2004 年からの野外調査により、国内では北海道知床半島の山岳、標高 1000~1500m 付近と千島列島南部のみで繁殖することが初めて明らかとなった。

国外では、ロシアの千島列島北部とサハリン、カムチャツカ半島で繁殖する。渡り途中の個体の記録地点は、北海道から本州、四国、九州、琉球諸島、大東諸島等、全国で記録がある。国内の主な生息環境は亜高山帯の針広混交林や森林限界より上のハイマツ帯である。

全長約 120mm。従来 1 種であったメボソムシクイ *Phylloscopus borealis* には 3 つの独立種、コムシクイ *Phylloscopus borealis*、メボソムシクイ *Phylloscopus xanthodryas*、本種オオムシクイが含まれているが、野外観察ではこれらの識別が困難な場合もある。最外初列風切羽(P10)と最長初列雨覆羽(GC)との長短の差は、メボソムシクイでは、P10 の方が GC よりも 2~3mm 長いのが通常である。コムシクイは P10 の方が GC よりも短い個体が多い。オオムシクイは、P10 が GC よりも長い個体もいれば、短い個体もいる。羽色では、メボソムシクイが最も、上面、下面共に黄色味が強く、コムシクイは黄色味が乏しく、オオムシクイはその中間の羽色をしている。音声の違いに関しては、囀りにおいて明確に区別が可能である(齋藤ほか, 2012; 齋藤ほか, 2014)。

随時見直しの評価理由

第 4 次レッドリストでは本種は、従来種メボソムシクイ *Phylloscopus borealis* の一亜種という扱いであったため、絶滅の危険度が低いとされて未掲載種となっていた。そのため、第 4 次レッドリスト検討後に新種記載された本種を対象とした評価が行われていなかった。このことから、随時見直しによる早急な検討が必要であると考えられた。生息域が北海道の知床半島を中心とした山系に局限されており、本邦産 633 種の中では最も繁殖分布域が小さいものの一つである。本種が繁殖する山系は、その多くが世界自然遺産の核心地域に含まれており、急速な環境悪化は現在それほど進んでいないものの、分布域が極度に限られているため、常に絶滅のリスクが高い状態に曝されていると考えられる。

存続を脅かす要因 局所分布(61)

執筆者: 齋藤武馬(公益財団法人山階鳥類研究所)

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : DD

スズメ目 ウグイス科

【鳥類】

ウグイスの1 亜種

日本固有亜種

Cettia diphone ssp.

削除理由

2002 年以降に沖縄島、喜界島などでダイトウグイスと形態的に区別できない個体群が確認されたが、日本鳥類目録改訂第 6 版に基づき、第 4 次レッドリストでは、この個体群を同じ亜種とは判断せず、「ウグイスの1 亜種」として評価していた。

その後、日本鳥類目録改訂第 7 版(日本鳥学会, 2012)において、ダイトウグイスとウグイスの1 亜種が同じ亜種と判断されたことに基づき、レッドリスト 2017 では 2 亜種を統合して「ダイトウグイス」として再評価を行ったことから本亜種を削除した。

【爬 虫 類】

■補遺資料掲載種一覧

※RL2017 カテゴリーごとに掲載

和名		学名		RL カテゴリー	
RL2015 (旧)	RL2017	RL2015 (旧)	RL2017	2015	2017
—	ヤエヤマイシガメ	—	<i>Mauremys mutica kami</i>	—	VU
オオシマトカゲ	オオシマトカゲ	<i>Plestiodon marginatus oshimensis</i>	<i>Plestiodon oshimensis</i>	NT*	NT
—	クチノシマトカゲ	—	<i>Plestiodon kuchinoshimensis</i>	—	DD

※一部集団がクチノシマトカゲとして分離されたため再評価

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

カメ目 イシガメ科

【爬虫類】

ヤエヤマイシガメ

日本固有亜種

Mauremys mutica kami Yasukawa, Ota & Iverson, 1996

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

八重山諸島の固有亜種で、石垣島、西表島及び与那国島に原産する。台湾から中国南部などに分布するミナミイシガメ *Mauremys mutica mutica* とは同種別亜種の関係。背甲長が 20cm 以下の中型種。基亜種ミナミイシガメと異なり、目の後方の黄色い筋模様が目立たない。砂泥底の穏やかな流れや止水に生息し、農業用ため池や水田などの人為的環境が主な生息環境となっている。春に水辺で交尾し、5月から7月にかけて産卵する。夜行性。

本亜種の分布域は石垣島(面積 223km²)、西表島(同 289km²)、与那国島(同 29km²)の3島に限定される。島の広い面積を占める牧草地や森林、渓流域、大河川の本流、マングローブ湿地等には本亜種は生息せず、出現範囲は水田(周囲の水路や池を含む)に限定される。これら3島における水田は継続的に減少傾向にあり、現在、およそ 600ha に過ぎない。本種は平成 27 年に石垣市の条例によって「石垣市希少野生動物植物保全種」に指定され、西表島の個体群は平成 29 年に竹富町の条例によって「特別希少野生動物植物種」に指定された。

随時見直しの評価理由

本亜種の生息地である水田は近年、急速に減少しており、本種が生息できない牧草地や藪地、市街地等に置き換わっている。すなわち、本亜種の分布域はそれほど広くなく、かつ減少傾向にあると推測される。上記3島を合計した個体数はおよそ 33,000 個体と推定されている。また本亜種は国内外でペット用等として盛んに利用されており、今なお野外採集が行われている。以上より、本亜種の生息状況は急速に変化(悪化)していると推測され、種の現状について随時見直しを行う必要があると考えられた。

存続を脅かす要因 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 捕獲・狩猟(41)

執筆: 矢部 隆(愛知学泉大学)・戸田光彦(一般財団法人自然環境研究センター)

NT

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : NT (種分離による再評価)

有鱗目 トカゲ科

【爬虫類】

オオシマトカゲ

日本固有種

Plestiodon oshimensis (Thompson, 1912)

カテゴリー判定基準: a) b)

基礎情報

オキナワトカゲの亜種とされていたが、近年の研究で遺伝的な違いが大きく、系統的にも明瞭に分岐することが明らかになったため、独立種とされた。外見でのオキナワトカゲとの識別はきわめて困難であるが、若齢個体では尾の上に伸びる淡色縦条が、基部の 1/3 程度までしかない点で区別できる。頭胴長は 60~100mm で変異が大きく、徳之島の集団には大型の個体が多い。体鱗列数は普通 26 列だが、島嶼により 24~30 列の変異がある。徳之島に最も近い硫黄鳥島の集団は 34 列と飛び抜けて多い。

与論島と沖永良部島を除く奄美諸島の島々、トカラ列島の宝島、小宝島、小島、諏訪之瀬島、及び沖縄県の硫黄鳥島に分布する。なおトカラ列島の中之島の個体群は本種ではなく、オキナワトカゲに属することがわかっている。小さな島嶼にも生息し、地理的な変異も知られている。イタチやマングースなどの侵入により、個体数が激減しており、小島嶼の集団については絶滅する可能性もある。

随時見直しの評価理由

2014 年にオキナワトカゲとイシガキトカゲの系統地理学的な検討が行われ、クチノシマトカゲが新種記載され、オオシマトカゲも亜種から独立種とされたので、レッドリストカテゴリーの再検討が必要であると考えられた。奄美諸島の喜界島やトカラ列島の諏訪之瀬島では大きく減少している。奄美大島、徳之島などでも、以前に比べて、個体数が減少している。

存続を脅かす要因 捕食(外来種による)(52-3)

執筆: 足田 努(京大学名誉教授)

DD

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし (種分離による評価)

無尾目 トカゲ科

【爬虫類】
日本固有種**クチノシマトカゲ***Plestiodon kuchinoshimensis* Kurita & Hikida, 2014

カテゴリー判定基準: b) c)

基礎情報

最近縁種はイシガキトカゲだが、形態はむしろオキナワトカゲ・オオシマトカゲに似る。後尾板は無く、幼体時には淡色の縦条が5本あり、外側の縦条は耳孔を通る。尾は水色で、尾の背面の縦条は不明瞭。胴中央部の体鱗列数は普通30列。繁殖生態に関する情報がない。

トカラ諸島の口之島にのみ分布する。トカラ列島北部の小さな島嶼では、ニホンイタチの導入により、トカゲ属の絶滅や個体数が激減しているが、本種については、中之島、諏訪之瀬島のように大きく減少していることはない。海岸、人家周辺、畑など島内のいろいろな場所で見ることができる。現在重要な捕食者はシマヘビ、テンで、ニホンイタチは定着していない。

随時見直しの評価理由

本種はオキナワトカゲに含まれると考えられていたが、むしろイシガキトカゲに近縁な種であることが判明し、2014年に新種記載された。本種を対象とした評価がこれまで行われていなかったため、随時見直しによる早急な検討が必要であると考えられた。ニホンイタチの再導入が行われれば、絶滅の可能性は高い。

存続を脅かす要因 捕食 (外来種による) (52-3)

執筆: 疋田 努(京大名誉教授)

【両生類】

■補遺資料掲載種一覧

※RL2017 カテゴリーごとに、学名アルファベット順に掲載

和名		学名		RL カテゴリー	
RL2015 (旧)	RL2017	RL2015 (旧)	RL2017	2015	2017
—	アマクササンショウウオ	—	<i>Hynobius amakusaensis</i>	—	CR
—	ツクバハコネサンショウウオ	—	<i>Onychodactylus tsukubaensis</i>	—	CR
—	オオスミサンショウウオ	—	<i>Hynobius osumiensis</i>	—	EN
—	ソボサンショウウオ	—	<i>Hynobius shimichisatoi</i>	—	EN
—	サドガエル	—	<i>Glandirana susurra</i>	—	VU
オオダイガハラサンショウウオ	オオダイガハラサンショウウオ	<i>Hynobius boulengeri</i>	<i>Hynobius boulengeri</i>	VU*	VU
—	シコクハコネサンショウウオ	—	<i>Onychodactylus kinneburii</i>	—	VU
—	タダミハコネサンショウウオ	—	<i>Onychodactylus fuscus</i>	—	NT
—	バンダイハコネサンショウウオ	—	<i>Onychodactylus intermedius</i>	—	NT

※一部集団がアマクササンショウウオ、オオスミサンショウウオ、ソボサンショウウオとして分離されたため再評価

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし (種分離による評価)

有尾目 サンショウウオ科

【両生類】
日本固有種

アマクササンショウウオ

Hynobius amakusaensis Nishikawa & Matsui, 2014

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

中～大型のサンショウウオで、全長 10.8～14.2cm、体色は濃い紫色から赤紫色で、白い小点がある。熊本県天草地方に分布する。変態後は山地の照葉樹林、二次林、人工林に生息しており、隠棲的で発見は難しい。幼生は産卵場所となる溪流中で生息し、半年から一年以上かかって変態する。

植林地の生息地では林床が乾燥して表土が流失しており、変態後個体の隠れ家や餌動物が減少している可能性がある。また、生息地の一部は愛好者などに知られているために、少なくとも繁殖に参加する成体はある程度の個体数が捕獲され減少していると思われる。また、生息地によっては、以前はいなかったイノシが増えて、林床を掘り返していることが確認されているので、本種が捕食されて個体数が減少している可能性がある。2015年には種の保存法に基づく国内希少野生動物種に指定された。

随時見直しの評価理由

本種は 2014 年にオオダイガハラサンショウウオより分割・新種記載された。本種を対象とした評価がこれまで行われていなかったため、随時見直しによる早急な検討が必要であると考えられた。本種は生息域がきわめて狭く、数地点の生息記録しか存在しない。さらに知られている生息地点には、人間の社会・経済活動のおよんでいる場所もある。生息地点数が少ないことから、そのうちの一箇所でも生息環境が破壊されれば、種の存続にとって致命的な事態になりかねない。そして、生息環境が人間活動範囲の近くであることから、開発などによりいつ生息状況が悪化してもおかしくないと言える。そのため、常に生息状況・環境の現況調査を行って、評価を継続する必要がある。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 河川開発(13) 道路建設(24) 水質汚濁(31) 捕獲・狩猟(41)

執筆: 西川完途(京都大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

有尾目 サンショウウオ科

【両生類】
日本固有種

ツクバハコネサンショウウオ

Onychodactylus tsukubaensis Yoshikawa & Matsui, 2013

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

従来ハコネサンショウウオとされてきたが、他地域の個体群と大きく遺伝的・形態的に異なることが明らかとなり、2013年に新種として記載された。2015年には種の保存法に基づく国内希少野生動物種に指定された。全長 12～16cm、尾が著しく短いのが特徴である。頭胴長に対する尾長の比率の平均値は他のハコネサンショウウオ属の構成種が概ねオスで 120%以上、メスで 100%以上なのに対し、本種はオスで約 100%、メスで約 90%。

茨城県の筑波山系にのみ分布する。概ね標高 350m 以上の場所に生息するが、繁殖場所は標高 600～700m の間で確認されている。南限は筑波山南麓、北限は加波山の北に位置する燕山付近である。主な生息環境は落葉広葉樹林や植林地を流れる溪流およびその周辺の林床である。

随時見直しの評価理由

本種は 2013 年に新種として記載された。生息域が茨城県の筑波山系に局限されており、本邦産サンショウウオの中では最も分布域が小さいものの一つである。同時に生息地では森林伐採等の生息環境の悪化も進んでおり、絶滅の危険性が増大し続けている。また新種記載後のマニアによる捕獲も脅威となっていた。第 4 次レッドリストでは現在の本種を含むハコネサンショウウオ(広義)は絶滅の危険度が低いとされて未掲載種となっており、第 4 次レッドリスト検討後に新種記載された本種を対象とした評価が行われていなかった。そのため随時見直しによる早急な検討が必要であると考えられた。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 河川開発(13) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) その他(71)

執筆: 吉川夏彦(国立科学博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし (種分離による評価)

有尾目 サンショウウオ科

【両生類】
日本固有種

オオミスサンショウウオ

Hynobius osumiensis Nishikawa & Matsui, 2014

カテゴリー判定基準:B-1.2

基礎情報

小～中型のサンショウウオで、全長 11.0～12.8cm、体色は濃い紫色で、白い小点が見られることもある。鹿児島県大隅半島に分布する。変態後は山地の照葉樹林、二次林、人工林に生息しており、隠棲的で発見は難しい。幼生は産卵場所となる溪流中で生息し、半年から一年以上かかって変態する。

一部の生息地では森林伐採が行われ、生息地や個体数の減少を招いている。特に低標高の地点では大規模な伐採が行われてきた場所もあり個体群に壊滅的な被害があったことが想像される。植林地やトンネル建設地では皆伐のために林床が乾燥して本種の生息ができなくなった場所もある。また、国や自治体による保護地域であっても、道路や様々な施設・構造物が建設されているために、本種に負の影響を与えて個体数が減少している可能性が高い。2015年には種の保存法に基づく国内希少野生動物種に指定された。

随時見直しの評価理由

本種は 2014 年にオオダイガハラサンショウウオより分割・新種記載された。本種を対象とした評価がこれまで行われていなかったため、随時見直しによる早急な検討が必要であると考えられた。本種は生息域が狭く、生息記録も多くはない。しかも生息地の一部は人間の社会・経済活動のおよぶ場所にある。特に低標高の森林では、道路建設や耕作地等の開発のために大規模に伐採されている場所もある。そのような場所では完全に地表が露出して乾燥するために、溪流には水がなくなり干上がっており、本種の生息は不可能である。このような生息環境は現在一部に限られているが、将来的に本種の健全な生息や遺伝的多様性を維持するためには、生息域全体を広く保全していくことが不可欠である。そのため、常に生息状況・環境の現況調査を行って、評価を継続する必要がある。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 洞窟の消失や環境悪化(18) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 捕獲・狩猟(41)

執筆: 西川完途(京都大学大学院)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし (種分離による評価)

有尾目 サンショウウオ科

【両生類】
日本固有種

ソボサンショウウオ

Hynobius shinichisatoi Nishikawa & Matsui, 2014

カテゴリー判定基準:B-1.2

基礎情報

大型のサンショウウオで、全長 13.7～18.0cm、濃い紫色の体色をしている。宮崎県・大分県・熊本県にまたがる祖母・傾山系に分布する。変態後個体は山地の照葉樹林、広葉樹林、二次林、人工林に生息しており、隠棲的で発見は難しい。幼生は産卵場所の溪流で生息して、半年から三年近くかかって変態する。

高標高の生息地も植林地であることが多く、手入れのされない場所は林床が荒れて、林道の崩壊が見られる。このような場所では繁殖場所である溪流が土砂で埋まるなどして、個体数が減少していることが考えられる。生息地の中でも低い標高の地域では様々な人間活動の影響があり、砂防ダムの工事により生息環境が悪化して越冬幼生が激減した溪流もある。2015年には種の保存法に基づく国内希少野生動物種に指定された。

随時見直しの評価理由

本種は 2014 年にオオダイガハラサンショウウオより分割・新種記載された。本種を対象とした評価がこれまで行われていなかったため、随時見直しによる早急な検討が必要であると考えられた。本種は生息域が狭く主に高標高の山地に生息しているために、生息記録は多くない。高標高の生息地であっても植林地であることも多く、林道建設などの影響が大きい。生息範囲の最も低い場所では、森林伐採や砂防ダム建設など、日常的な人間活動の影響もある。幸いにして開発や植林のできないような急峻な環境にも生息しているが、幼生期間が数年におよぶ個体も知られているために、安定した水量の溪流が重要である。そのために繁殖場所の溪流と、水源である周辺の良い森林環境を合わせて長期的に維持することが不可欠であり、常に生息状況・環境の現況調査を行って、評価を継続する必要がある。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 河川開発(13) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 捕獲・狩猟(41)

執筆: 西川完途(京都大学大学院)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

無尾目 アカガエル科

【両生類】
日本固有種

サドガエル

Glandirana susurra (Sekiya, Miura & Ogata, 2012)

カテゴリー判定基準: A-3 B-1.2

基礎情報

成体は体長 33-50 mm、背面はほぼ黄褐色でツチガエルに似るが、皮膚はずっと滑らかで、とくに下顎が滑らかなことで大きく異なる。また、腹面後半部は濃い黄色であり、後肢腹面に暗褐色の斑紋をもつ。ツチガエルと異なり鳴嚢(めいのう)をもたず、鳴き声もまったく違って長く続く。佐渡島ではツチガエルと地理的に生殖隔離されており、人工交配して生じる正逆雑種のほとんどは、精子の少ない雄になり、雌に戻し交配すると極度に妊性が低下する。

佐渡島中央部にある国仲平野の平地にのみ分布し、常に水辺のすぐ近くに生息する。

随時見直しの評価理由

本州から九州に自然分布し、北海道にも人為移入され定着しているツチガエルから、近年形態、鳴き声の違いに基づき独立種とされたものである。分布域が極めて限られ、絶滅の可能性があるため評価を行った。

存続を脅かす要因 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 農薬汚染(32) 捕食(外来種による)(52-3) 捕食(在来種による)(52-4) 競争(外来種による)(56-1) 局所分布(61)

執筆: 松井正文(京都大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : VU (種分離による再評価)

有尾目 サンショウウオ科

【両生類】
日本固有種

オオダイガハラサンショウウオ

Hynobius boulengeri (Thompson, 1912)

カテゴリー判定基準: B-1.2 D

基礎情報

全長は 13.6~19.4cm、きわめて大型で頑健な体型のサンショウウオで、体色は一様な石板色で、ほとんど斑紋をもたず、尾の側偏の程度が著しいことで四国産のイヅチサンショウウオ、九州山地産のソボサンショウウオを除く他のどの種とも区別される。本種は本州の近畿地方南部を東西に走る紀ノ川、吉野川の一線以南(三重県、奈良県、和歌山県の3県)の山地の照葉樹林、広葉樹林、二次林、人工林に生息しており、幼生段階で他種と生態的にすみ分けており、三重県下ではコガタブチサンショウウオ、ハコネサンショウウオよりも上流に生息する。繁殖は年1回、本州の低地では2月下旬から、高地では5月上旬~下旬で1メスの産卵数は19~63個程度である。幼生は産卵場所となる溪流中で生息し、半年から二年近くかかって変態する。変態後は隠棲的で発見は難しい。

生息地の多くで植林や林道が建設されているために、生息環境の悪化が認められる。紀伊半島は植林が盛んなために、本種の生息地は大規模な植林地にされることが多く、繁殖場所である溪流や周辺の冷涼で湿度の高い原生林が壊滅して、個体数が減少してきたことは間違いない。また生息地が観光地化されている場所では、大規模な開発による生息環境の破壊や観光客の増加による影響が大きな問題になっている。

随時見直しの評価理由

本種よりアマクササンショウウオ、オオスミサンショウウオ、ソボサンショウウオ(いずれも2014年に新種記載)が分離されたため、分離後の集団についてレッドリストカテゴリーの再検討が必要であると考えられた。本種は生息域が紀伊半島の主に高標高の山地に限られるために、生息記録は多くない。高標高の生息地であっても植林地や観光地であることもあり人間活動の影響が知られている。標高の低い場所では、森林伐採、砂防ダム建設、河川工事など、さらに多くの人間活動の影響がある。幼生期間が数年におよぶ個体も知られているために、安定した水量の溪流とその水源である良好な森林環境を長期的に維持することが不可欠である。ゆえに、常に生息状況・環境の現況調査を行って、評価を継続する必要がある。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 河川開発(13) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 交通事故(26) 水質汚濁(31) 捕獲・狩猟(41)

執筆: 西川完途(京都大学大学院)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

有尾目 サンショウウオ科

【両生類】
日本固有種

シコクハコネサンショウウオ

Onychodactylus kinneburi Yoshikawa, Matsui, Tanabe & Okayama, 2013

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

2013年に新種記載された。種小名は四国石鎚山での本種の地方名「キンネブリ」に因む。繁殖は初夏に行われる。全長 12~18cm、背面に明瞭な黄色や橙黄色の縦帯または不連続な斑紋をもち、腹面は白から灰色で白点をほとんど生じない。ハコネサンショウウオでみられる胸部腹面の暗色斑紋を本種は欠く。

四国・中国地方の山地の概ね標高 700m 以上の地域に生息する。現在知られる四国における東限は徳島県三好市剣山周辺、西南限は愛媛県内子町 (Yoshikawa and Matsui, 2013)。高縄半島にも生息する (岡山・千葉, 1995)。中国山地では山口県岩国市、広島県廿日市市、岡山県鏡野町の山地で確認されている (Yoshikawa et al., 2008)。中国地方ではハコネサンショウウオと同所的に分布しているが交雑はほとんど見られない (Yoshikawa et al., 2008; Yoshikawa et al., 2010; 吉川, 2015a)。

随時見直しの評価理由

2013年に新種として記載された本種は、生息地が高標高の山岳地帯に限定されており、かつ既知の分布域は四国の山岳地帯と中国山地の一部とに分断されている。同時に生息地では道路やダム建設等により生息環境の悪化も進んでおり、個体数が減少している。以上のような状況の中、本種を対象とした評価がこれまで行われていなかったため、随時見直しによる早急なレッドリストカテゴリーの検討が必要であると考えられた。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 河川開発(13) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕食 (外来種による) (52-3)

執筆: 吉川夏彦(国立科学博物館)

NT

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

有尾目 サンショウウオ科

【両生類】
日本固有種

タダミハコネサンショウウオ

Onychodactylus fuscus Yoshikawa & Matsui, 2014

カテゴリー判定基準: b)

基礎情報

2014年に新種記載された。全長 12~17cm、背面の斑紋を欠き、一様に暗褐色なのが大きな特徴で、体側部から腹面に白点を持つものが多い。同属他種の多くと異なり 11 月頃の初冬に繁殖を行う。

福島県只見町、新潟県三条市、魚沼市の県境付近に広がる山地に生息する。只見町以外での網羅的な分布調査は行われていないが、現在知られる北限は三条市笠堀地区、東限は只見町北東部、南限は只見町田子倉ダム南岸、西限は魚沼市 (Yoshikawa and Matsui, 2014; 吉川, 2015a)。只見川右岸では数地点でしか確認されていない (吉川, 未発表)。分布域全域でハコネサンショウウオと同所的に生息している (Yoshikawa and Matsui, 2014; 吉川, 2015b)。

随時見直しの評価理由

本種は 2014年に新種として記載された。既知の生息域が福島県只見町、新潟県三条市および魚沼市に限られており、本邦産サンショウウオとしては分布域が狭い。同時に生息地では道路建設等により生息環境の悪化もみられ、個体数の減少が危惧されている。第 4 次レッドリスト検討後に新種記載された本種を対象とした評価がこれまで行われていなかったため、随時見直しによる早急な検討が必要であると考えられた。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 河川開発(13) 道路建設(24) ダム建設(25)

執筆: 吉川夏彦(国立科学博物館)

NT

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

有尾目 サンショウウオ科

【両生類】
日本固有種**バンダイハコネサンショウウオ***Onychodactylus intermedius* Yoshikawa & Matsui, 2014

カテゴリー判定基準: a) b)

基礎情報

2014 年にハコネサンショウウオから分割・新種記載された。ハコネサンショウウオおよびキタオウシュウサンショウウオと分布を接するが、これらとの交雑はほとんどないと考えられる(Yoshikawa et al., 2012)。全長 11~18cm、背面に不明瞭な黄褐色の縦帯を持ち、体側部から腹面に白点を生じるものが多い。外見は上記の 2 種に酷似し形態的な識別は難しいが、それらに比べてやや尾が短い傾向がある。

東北地方南部(山形県、宮城県南部、福島県中北部・東部)、茨城県北東部、新潟県北部に分布する(Yoshikawa and Matsui, 2014; 吉川, 2015a)。北限は日本海側の朝日山地では山形県酒田市付近、奥羽山地脊梁部では蔵王山南麓。南限は茨城県日立市付近。標高およそ 400m 以上のところに多いが、阿武隈山地北部の太平洋岸や日本海側の低山地では比較的低標高の場所にも生息する。福島県新地町では標高 160m の沢で確認した(吉川・稲葉, 未発表)。

随時見直しの評価理由

2014 年に新種として記載された種で、第 4 次レッドリスト検討後に記載されたために本種を対象とした評価がこれまで行われていなかった。分布域は狭くはないものの、環境が悪化している生息地もみられるため、随時見直しによる早急なレッドリストカテゴリーの検討が必要であると考えられた。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 河川開発(13) 道路建設(24) ダム建設(25) 遷移進行・植生変化(54)

執筆者: 吉川夏彦(国立科学博物館)

【汽水・淡水魚類】

■補遺資料掲載種一覧

※RL2017 カテゴリーごとに、学名アルファベット順に掲載

和名		学名		RL カテゴリー	
RL2015 (旧)	RL2017	RL2015 (旧)	RL2017	2015	2017
—	ヨドコガタスジシマドジョウ	—	<i>Cobitis minamorii yodoensis</i>	—	CR
—	ヒスイボウズハゼ	—	<i>Stiphodon alcedo</i>	—	CR
ピワコガタスジシマドジョウ (ヨドコガタスジシマドジョウ を含む)	ピワコガタスジシマドジョウ	<i>Cobitis minamorii oumiensis</i>	<i>Cobitis minamorii oumiensis</i>	EN*	EN
—	トラフボウズハゼ	—	<i>Stiphodon multisquamus</i>	—	DD
—	ニライカナイボウズハゼ	—	<i>Stiphodon niraikanaiensis</i>	—	DD

※一部集団がヨドコガタスジシマドジョウとして分離されたため再評価

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし (種分離による評価)

コイ目 ドジョウ科

【汽水・淡水魚類】
日本固有亜種

ヨドコガタスジシマドジョウ

Cobitis minamorii yodoensis Nakajima, 2012

カテゴリー判定基準 : B-1,2,3 C2b D

基礎情報

全長は 6~7 cm。体色は白色で体側の縦条は不完全な縦帯となる。口ひげは 3 対。胸鰭から腹鰭までの筋節数は通常 12 (11~13)。尾鰭基部の表層の斑紋は離れており、上葉が小型で漆黒の楕円形、下葉は不明瞭な斑点となる。

淀川水系の中下流域(京都府宇治川と大阪府淀川)のみに分布する。主に流れの緩やかな砂泥底の環境や、増水時に本流とつながるような小水域(ワンド・タマリ)の氾濫原環境などを利用していただけると考えられる。河川改修や開発などの進行、河口堰建設に伴う水位変動様式の変化により生息環境の悪化、産卵環境の消失および生息場・繁殖場をつなぐ水域ネットワークの分断などが起こり、本亜種個体群の減少をもたらしたと考えられる。1996 年以降に確実な確認記録がなく、絶滅した可能性も高い。

随時見直しの評価理由

本亜種はかつて淀川水系中下流域を中心として本流や氾濫原環境などに生息していただけると考えられるが、1996 年以降、確実な採集記録がなく、絶滅の可能性が高いと考えられる。

加えて、本亜種は第 4 次レッドリスト検討時にビワコガタスジシマドジョウ *Cobitis minamorii oumiensis* の一部として評価されていた。Nakajima(2012)により、これらの 2 種は亜種として分類されたこと、さらに両亜種をとりまく現状が大きく異なっているため、改めて本亜種のみでの評価を行う必要があると考えられた。

存続を脅かす要因 河川開発(13) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 局所分布(61)

執筆者: 金尾滋史(滋賀県立琵琶湖博物館)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

スズキ目 ハゼ科

【汽水・淡水魚類】

ヒスイボウズハゼ

Stiphodon alcedo Maeda, Mukai & Tachihara, 2012

カテゴリー判定基準 : C1 D

基礎情報

最大全長は約 6 cm。雄の婚姻色には変異がある。雌の体側中央を通る縦線がやや腹面寄りに位置する。体色のほか、第 2 背鰭および胸鰭の鰭条数(きじょうすう)、歯の数、鱗の配置などにより同属他種と区別される。河川淡水域中流部の淵で見られることが多い。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられ、他のボウズハゼ類と同様に卵は非常に小さい。琉球列島と台湾から報告されている。東南アジアにも分布する可能性があるが、報告はない。

国内では、沖縄島と西表島のみから報告されている。沖縄島では 2006 年以降 7 河川で見つかり、産卵も確認された。多くの川では一時的な出現に留まったが、8 年間にわたって継続して観察された例もある。100 個体以上が一度に見つかることもあったが、そこでは冬を越さずに姿を消した。現在は確認できていない。本種が確認された河川の多くで浚渫や改修工事が行われ、これが本種個体群の安定した生息を困難にした可能性がある。西表島では 3 河川で確認された。個体数は少ない。

随時見直しの評価理由

2012 年に新種として記載された(その時点では国内のみから知られていた)。分布が局所的で、個体数も少ないため、早急に評価の必要があると考えられた。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 河川開発(13) 道路建設(24) ダム建設(25) 局所分布(61)

執筆者: 前田 健(沖縄科学技術大学院大学)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : EN (種分離による再評価)

コイ目 ドジョウ科

【汽水・淡水魚類】
日本固有亜種

ピワコガタスジシマドジョウ

Cobitis minamorii oumiensis Nakajima, 2012

カテゴリー判定基準: B-1,2,3

基礎情報

全長は5~8cm。体色は白色および淡黄色で、体側の縦条はいずれも縦帯となる。口ひげは3対。胸鰭から腹鰭までの筋節数は11~13(通常12)。尾鰭基部の表層の斑紋は上葉と下葉が連続し、上葉が漆黒、下葉が淡色となる。

琵琶湖湖岸域および繁殖場所となる周辺細流・水路・氾濫原環境などに生息する。琵琶湖内における具体的な生息状況は不明で、まれに湖内でのエリ漁、刺し網漁などで採集されることがある。5月から7月にかけての繁殖期には周囲の水田地帯や氾濫原に成魚が出現し、産卵を行なう。また、仔稚魚期は繁殖場所と同様の環境を利用する。現在本亜種が確認される地域は、極めて限定された湖岸域の水路や水田地帯であり、それぞれの生息地で確認できる個体数は少ない。

随時見直しの評価理由

本亜種はかつて琵琶湖北湖を中心として、琵琶湖沿岸とその周辺域に分布していたと考えられるが、近年における生息域の減少、生息環境の悪化は著しく、減少傾向に歯止めがかかっている。現在本亜種が確認されている地域はきわめて限定的であり、絶滅の危険性が増大していると考えられる。

加えて、第4次レッドリスト検討時には本亜種にヨドコガタスジシマドジョウ *Cobitis minamorii yodoensis* が含まれて評価されていた。Nakajima(2012)により、これらの2種は亜種として分類されたこと、さらに両亜種をとりまく現状が大きく異なっているため、改めて本亜種のみでの評価を行う必要があると考えられた。

存続を脅かす要因 湖沼開発(12) 河川開発(13) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 土地造成(23) ダム建設(25) 捕食(外来種による)(52-3)

執筆: 金尾滋史(滋賀県立琵琶湖博物館)

DD

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

スズキ目 ハゼ科

【汽水・淡水魚類】

トラフボウズハゼ

Stiphodon multisquamus Wu & Ni, 1986

カテゴリー判定基準: a) b)

基礎情報

ナンヨウボウズハゼ属の中で特に大きくなる種の一つで、最大全長は8cmを超える。雌雄とも体側に9~11本の暗色横帯があり、後頭部と項部に2または3本の明瞭な乳白色の横帯を持つ。体色のほか、第2背鰭および胸鰭の鰭条数(きじょうすう)、歯の数、鱗の配置などにより同属他種と区別される。河川淡水域中流部の淵に生息する。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。中国南部、ベトナム、マレーシア、琉球列島に分布するが、ベトナム以外では個体数が少ないようである。

国内では沖縄島と奄美大島で見つかっているが、極めて稀である。国内における再生産の有無は不明。継続した生息は確認されていない。本種が見つかった河川では浚渫や改修工事が頻繁に行われ、本種の定着を妨げている可能性がある。

随時見直しの評価理由

2013年に国内における分布が初めて報告された。分布が局所的で、個体数も少ないため、早急に評価の必要があると考えられた。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 河川開発(13) 道路建設(24) ダム建設(25) 局所分布(61)

執筆: 前田 健(沖縄科学技術大学院大学)

DD

旧カテゴリー(レッドリスト2015) : なし

スズキ目 ハゼ科

【汽水・淡水魚類】

ニライカナイボウズハゼ

Stiphodon niraikanaiensis Maeda, 2013

カテゴリー判定基準 : a) b)

基礎情報

最大全長は約 5 cm。雄は第 2 背鰭と尾鰭に特徴的な黒色帯を持つ。雌も体側と鰭に特徴的な色斑を持つ。体色のほか、第 2 背鰭および胸鰭の鰭条数、歯の数、鱗の配置などにより同属他種と区別される。河川淡水域中流部の主に平瀬で見られる。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。これまで沖縄島のみで見つかっている。国外にも分布する可能性があるが、報告はない。

これまでに知られている生息地は沖縄島のみであるが、4 河川からわずかな個体数が見つかったのみで、極めて稀である。継続した生息は確認されていない。熱帯域に未知の生息地があり、そこから加入した可能性が示唆されるが、現状では不明な点が多い。本種が見つかった河川では浚渫や改修工事が頻繁に行われ、本種の定着を妨げている可能性がある。

随時見直しの評価理由

2013 年に新種として記載された。これまでに知られている生息地は、沖縄島の河川のみである。分布が局所的で、個体数も少ないため、早急に評価の必要があると考えられた。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 河川開発(13) 道路建設(24) ダム建設(25) 局所分布(61)

執筆者: 前田 健(沖縄科学技術大学院大学)

【昆虫類】

■補遺資料掲載種一覧

※RL2017 カテゴリーごとに、学名アルファベット順に掲載

和名		学名		RL カテゴリー	
RL2015 (旧)	RL2017	RL2015 (旧)	RL2017	2015	2017
タカネキマダラセセリ南アルプス亜種	タカネキマダラセセリ赤石山脈亜種	<i>Carterocephalus palaemon akaishianus</i>	<i>Carterocephalus palaemon akaishianus</i>	VU	CR
ツシマウラボシシジミ	ツシマウラボシシジミ	<i>Pithecopus fulgens tsushmanus</i>	<i>Pithecopus fulgens tsushmanus</i>	VU	CR
アサマシジミ北海道亜種	アサマシジミ北海道亜種	<i>Plebejus subsolanus iburiensis</i>	<i>Plebejus subsolanus iburiensis</i>	EN	CR
ヤクシマハリアリ	削除	<i>Ponera yakushimensis</i>	削除	NT	削除

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : VU

チョウ目 セセリチョウ科

【昆虫類】

タカネキマダラセセリ赤石山脈亜種

日本固有亜種

Carterocephalus palaemon akaishianus Fujioka, 1970

カテゴリー判定基準: B-1.3

基礎情報

レッドデータブック 2014(昆虫類)p. 342.を参照(旧和名のタカネキマダラセセリ南アルプス亜種で掲載)。

https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/昆虫類_340.pdf

随時見直しの評価理由

第4次レッドリストの評価以降、近年南アルプスにおけるニホンジカの増加に伴う顕著な食性の変化が確認されており、その影響による本種の幼虫の食草であるイネ科のイワノガリヤスの減少が懸念されていた。

2015年、2016年に環境省事業により過去に生息記録のある数十カ所において調査が実施されたところ、生息が確認できたのは僅か1カ所であり、生息状況が極めて危機的な状況であることが明らかとなったことから、今年度随時見直しにおける評価を行った。

存続を脅かす要因 河川開発(13) 捕獲・狩猟(41) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

執筆: 矢後勝也(東京大学総合研究博物館)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : VU

チョウ目 シジミチョウ科

【昆虫類】

ツシマウラボシシジミ

日本固有亜種

Pithecopis fulgens tsushmanus Shirôzu & Urata, 1957

カテゴリー判定基準: B-1.3 D

基礎情報

レッドデータブック 2014(昆虫類)p. 335.を参照。

https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/昆虫類_333.pdf

随時見直しの評価理由

本種は、第4次レッドリストの評価以降、生息地の対馬におけるニホンジカの食害にともない幼虫の食草となるマメ科のヌズビトハギやフジカンゾウ等の減少が顕著であり、大部分の生息地が消失した。

2013年の時点で現存する生息地は1カ所に限られ、現在は生息域外保全により増殖させた個体の補強や野生復帰の取り組み等の努力により野生個体群を維持している状況にあることから、今年度随時見直しにおいて評価を行った。

存続を脅かす要因 捕獲・狩猟(41) 遷移進行・植生変化(54)

執筆: 中村康弘(日本チョウ類保全協会)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : EN

チョウ目 シジミチョウ科

【昆虫類】

アサマシジミ北海道亜種

日本固有亜種

Plebejus subsolanus iburiensis (Butler, 1882)

カテゴリー判定基準: A-2 B-1.3

基礎情報

レッドデータブック 2014(昆虫類)p. 156.を参照。

https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/昆虫類_154.pdf

随時見直しの評価理由

本亜種は北海道のみに分布し、道路や農地周辺の草地、天然の草原、採草地に生息することから、開発の影響を受けやすいほか、生息地の管理不足等により、環境悪化が生じやすい状況にあった。第4次レッドリストの評価以降に行われた環境省の調査等により、生息範囲が極めて小さいことが明らかとなったことから、今年度随時見直しにおいて評価を行った。

存続を脅かす要因 圃場整備(15-2) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54)

執筆: 中村康弘(日本チョウ類保全協会)

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : NT

ハチ目 アリ科

【昆虫類】

ヤクシマハリアリ

Ponera yakushimensis Tanaka, 1974

削除理由

レッドデータブック 2014 での記述のとおり、本種はテラニシハリアリ *Ponera scabra* の同物異名(シノニム)であることが明らかになっており(Yoshimura et al., 2009)、ヤクシマハリアリとされる個体群はテラニシハリアリに含まれるためレッドリスト 2017 において本種を削除した。

なお、テラニシハリアリについては、本州、四国、九州の各地に分布するまれではない種であることから、レッドリスト 2017 には掲載されていない。

【貝 類】

■補遺資料掲載種一覧

※RL2017 カテゴリーごとに、科名五十音順、学名アルファベット順に掲載

科名	和名		学名		RL カテゴリー	
	RL2015 (旧)	RL2017	RL2015 (旧)	RL2017	2015	2017
イソマデガイ科	ヨナグニカタヤマガイ	ヨナグニカタヤマガイ	<i>Gammatricula shini</i>	<i>Gammatricula shini</i>	VU	CR
オナジマイマイ科	サメハダヘソアキアツマイマイ	オオアガリマイマイ	<i>Nesiohelix omphalina proximata</i>	<i>Nesiohelix omphalina bipyramidalis</i>	VU	CR
	ヘソアキアツマイマイ	ヘソアキアツマイマイ	<i>Nesiohelix omphalina omphalina</i>	<i>Nesiohelix omphalina omphalina</i>	NT	CR
カワザンショウ科	—	ダイトウオカチグサ (ダイトウヘソカド)	—	<i>Paludinellassiminea daitoensis</i>	—	CR
キセルガイ科	ミヤコオキナワギセル	ミヤコオキナワギセル	<i>Phaedusa striatella</i>	<i>Phaedusa striatella</i>	VU	CR
	—	ナルトギセル	—	<i>Tyrannophaedusa fukudainadai</i>	—	CR
	ダイトウノミギセル	ダイトウノミギセル	<i>Zaptyx daitojimana</i>	<i>Zaptyx daitojimana</i>	NT	CR
キバウミナナ科	—	ヌノメヘナタリ	—	<i>Pirenella cancellata</i>	—	CR
クビキレガイ科	—	オカクビキレガイ	—	<i>Truncatella oagariensis</i>	—	CR
	キザハシクビキレガイ	キザハシクビキレガイ	<i>Truncatella</i> sp. A	<i>Truncatella</i> sp. A	DD	CR
	カガヨイクビキレガイ	カガヨイクビキレガイ	<i>Truncatella</i> sp. B	<i>Truncatella</i> sp. B	DD	CR
ニッコウガイ科	—	チリメンジュロウジン	—	<i>Apolymetis meyeri</i>	—	CR
ヤマタニシ科	—	オキナワムシオイ	—	<i>Chamalycaeus okinawaensis</i>	—	CR
アヤボラ科	—	ウネボラ	—	<i>Gyrineum natator</i>	—	EN
ナンバンマイマイ科	—	ツシマウスカワマイマイモドキ	—	<i>Chosenelix</i> sp.	—	EN
	—	アキラマイマイ	—	<i>Satsuma akiratadai</i>	—	EN
	ヨナクニマイマイ	ヨナクニマイマイ	<i>Satsuma caliginosa picta</i>	<i>Satsuma caliginosa picta</i>	NT	EN
	—	シラユキヤマタカマイマイ	—	<i>Satsuma largillierti</i>	—	EN
ヒラマキガイ科	ヒメヒラマキミズマイマイ	ヒメヒラマキミズマイマイ	<i>Gyraulus pulcher</i>	<i>Gyraulus pulcher</i>	DD	EN
ヤマタニシ科	ヒラセアツブタガイ	ヒラセアツブタガイ	<i>Platyrhaphe hirasei hirasei</i>	<i>Platyrhaphe hirasei hirasei</i>	NT	EN
イモガイ科	—	ベッコウイモ	—	<i>Conus fulmen</i>	—	VU
エゾバイ科	—	ナガゴマフホラダマシ (ゴマフホラダマシ)	—	<i>Engina menkeana</i>	—	VU
カノキセワタ科	—	エゾキセワタ	—	<i>Melanochlamys ezoensis</i>	—	VU
	ヤミヨキセワタ	ヤミヨキセワタ	<i>Melanochlamys</i> sp.	<i>Melanochlamys fukudai</i>	DD	VU
キバウミナナ科	—	ヤエヤマヘナタリ	—	<i>Pirenella asiatica</i>	—	VU
クビキレガイ科	—	アマミクビキレガイ	—	<i>Truncatella</i> sp. C	—	VU
ナンバンマイマイ科	—	チョウシュウシロマイマイ	—	<i>Aegista hiroshifukudai</i>	—	VU
オナジマイマイ科	ミヤケチャイロマイマイ	削除	<i>Phaeoherix miyakejimana</i>	削除	NT	削除

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : VU

新生種目 イツマデガイ科

【貝類】

ヨナグニカタヤマガイ

日本固有種

Gammatricula shini (Habe, 1961)

カテゴリー判定基準: B-1,3

基礎情報

八重山諸島の与那国島にのみ分布する。貝殻は微小(殻長 3.0~3.2mm、殻径 1.4~2.0mm)、長卵形、殻頂に向けて細くなり、乳白色からあめ色で光沢がある。螺層は 5.5 層。体層は大きくて、殻長の 2 分の 1 よりも大きく、周縁に角がなく、殻底は円い。殻口は卵形で、前方へ円く、後方へ多少狭くなる。周縁は連続、外唇は多少厚くなる。軸唇は厚くなり湾曲する。臍孔(さいこう)は開かず、裂け目状となる。生息場所によっては著しく浸食されている個体もある。蓋は薄く、角質、少旋型。生息地は山地の湧水地、小さな流れ、地下水が浸み出す石灰岩地の洞窟内湿地などであるが、水深のある大きな流れの所には生息しない(レッドデータブック 2014(貝類)p.294(湊, 2014)より引用)。姉妹種は中国福建省の山中に産し、本種は遺存種(かつては広く分布していたが、現在では限られた地域にのみ生息する種)と考えられ生物地理学的に貴重である。

随時見直しの評価理由

第 4 次レッドリスト検討時は絶滅危惧 II 類(VU)とされていたが、それ以降の調査の結果、産地数・個体数とも極端に少ない希少種であり、人為的要因による生息環境の減少に伴って危機的状況にあることが判明した。2015 年の調査では過去に記録のある場所の大部分で再発見できず、既に多くの産地が消失したことは確実である。今や、日本の淡水産貝類全体でも、生息範囲が最も狭い種の一つとなった。このため、絶滅危惧 IA 類(CR)とするのが妥当である。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 河川開発(13) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 洞窟の消失や環境悪化(18) 土地造成(23) 道路建設(24) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 自然災害(55) 局所分布(61)

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : VU

異種目 オナジマイマイ科

【貝類】

オオアガリマイマイ

日本固有亜種

Nesiohelix omphalina bipyramidalis Kuroda & Emura, 1943

カテゴリー判定基準: B-1,3

基礎情報

レッドデータブック 2014(貝類)p. 365.を参照(旧和名のサメハダヘソアキアツマイマイで掲載)。

https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/貝類_363.pdf

随時見直しの評価理由

第 4 次レッドリスト公表後、増田ほか(2015)により危機的状況にあることが報告され、沖縄県レッドデータブック改訂にかかる実地調査(2015 年実施)でも、2000 年代半ばに多産していた地点の半数で生存を確認できなかった。近年まで生息していたと考えられる産地では外来種ニューギニアヤリガタリクウズムシが生息し、破損のない死殻も大量に散乱しており、ウズムシによる捕食の影響が極めて大きいと考えられる。また、目立った改変のない小規模な林でも姿を消していることから、近年の過剰乾燥も個体群を縮小させる要因である可能性が高い。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 圃場整備(15-2) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) 競争(外来種による)(56-1) 局所分布(61)

執筆: 亀田勇一(国立科学博物館)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : NT

異種目 オナヅマイマイ科

【貝類】

ヘソアキアツマイマイ

日本固有亜種

Nesiohelix omphalina omphalina (Hirase, 1915)

カテゴリー判定基準:A-2 B-1.3

基礎情報

殻は殻径約 24mm、低い卵円錐形で厚く、周縁は丸い。殻表はほぼ平滑で細かい成長脈のみを持つ。殻口は強く肥厚し反転する。臍孔はやや狭いが明瞭に開く。軟体の頭部背面は黒みの強い褐色、足の背面はやや色が薄くなる。生殖器には臍後端付近に矢囊(しのう)と粘液腺をもつ。

北大東島固有亜種。2000 年代中頃までは長幕の自然林に多産し、1 日で 100 個体以上を見出すことも容易であったが、近年激減し、2015、2016 年の調査では数個体～十数個体しか確認されていない。古い死殻は島の各所で見出されるが、生貝が確認されたのは長幕でもごく狭い一角のみである。長幕帯には死後 2、3 年以内とみられる真新しい死殻が大量に転がっており、捕食者であるニューギニアヤリガタリクウズムシの侵入などにより短期間で激減した可能性が極めて高い。

随時見直しの評価理由

第 4 次レッドリスト公表後、増田ほか(2015)により危機的状況にあることが報告され、沖縄県レッドデータブック改訂にかかる実地調査(2016 年実施)でも 1 地点でわずかに数個体を確認されたのみであった。現存産地や近年まで生息していたと考えられる産地では破損のない死殻が大量に散乱していることから、外来種ニューギニアヤリガタリクウズムシによる捕食の影響が極めて大きいと考えられ、直近 10 年で生息密度は 100 分の 1 以下に低下している。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3)

執筆: 亀田勇一(国立科学博物館)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

新生種目 カワザンショウ科

【貝類】

ダイトウオカチグサ (ダイトウヘソカド)

日本固有種

Paludinellassiminea daitoensis (Habe, 1942)

カテゴリー判定基準:B-1.3

基礎情報

殻長 4.8mm、殻径 3.3mm。殻は卵円錐形、橙色で殻表はほぼ平滑、臍孔(さいこう)は狭い。殻ではウスイロヘソカドとの区別が難しいが、左側の雑搬溝後方の縁取りが前端でゴルフクラブ状に前方へ突出することで識別される。

北大東島と南大東島の固有種。海岸から内陸にかけて見られ、広葉樹根元の石灰岩岩盤の隙間や地表の落葉・転石間に棲み、高湿時に匍匐する。

20 世紀末までは島内各所に多産したと推定されるが、2000 年代半ばから急激に衰退傾向に転じた。北大東島では長幕の森林内と海岸数箇所、南大東島ではバリバリ岩と海岸数箇所に個体群が現存するが、分布は局所的で生息範囲は著しく狭く、最近 15 年間での個体群の消滅が多発している。

随時見直しの評価理由

従来は同属のウスイロヘソカド *Paludinellassiminea stricta* の異名とされてきたため存在が認識されず、第 4 次レッドリストでも対象外であったが、実際は明確に識別可能な別種かつ大東諸島固有種で、人為的要因による生息環境の減少に伴って危機的状況にあると判明した。近年の温暖化と過剰乾燥や、移入種ニューギニアヤリガタリクウズムシによる食害が懸念され、既に多くの個体群が消滅した可能性が高い。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 海岸開発(14) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 農薬汚染(32) 捕食(外来種による)(52-3) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : VU

異名目 キセルガイ科

【貝類】

ミヤコオキナワギセル

日本固有種

Phaedusa striatella (Pilsbry, 1901)

カテゴリー判定基準:A-2 B-1,2,3

基礎情報

レッドデータブック 2014(貝類)p. 337.を参照。

https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/貝類_335.pdf

随時見直しの評価理由

宮古島固有種であり、かつては上比屋森や野原岳の広範囲など、島内の広域に生息したと考えられる。現在は、野原岳のきわめて狭い範囲にしか生息せず、周辺開発の影響も考慮され、第4次レッドリストでは絶滅危惧II類(VU)とされた。近年では、久保(2016)の調査において、そのごく僅かな生息地も人為的改変行為がなされ、個体群はさらに大きな影響を受けたことが報告されている。そのため、本種の絶滅に対する危険度は、かつてないほど上昇している。このため、本種のランクを絶滅危惧IA類(CR)に引き上げた。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41)

執筆:早瀬善正(株式会社東海アクアノーツ)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

異名目 キセルガイ科

【貝類】

ナルトギセル

日本固有種

Tyrannophaedusa fukudainadai Minato, 2014

カテゴリー判定基準:B-1,2,3

基礎情報

殻長 10.9~13.8 mm、殻径 2.9~3.4 mm程度。淡黄白色で小形。螺層は7~8.5層で、短い棍棒様。殻口外唇の後方に明らかな隆起(クレスト)を有する。生殖器には、陰茎本体との境界の陰茎部が肥大する特徴がある。

徳島県鳴門市大毛島のごく狭い範囲のみに生息する。2014年の新種記載より前に、既に道路工事により生息の中心域は破壊されている。

早瀬(2011年11月)の調査から、現状の個体数は200個体に満たないことが分かっている。稀産種ということもあり、採集圧が著しいため、個体数は継続的な減少傾向にある。

随時見直しの評価理由

2014年に新種記載されたため評価を行った。本種は25m×25m程度の局所的な範囲内にしか生息が確認されていない。生息地域の環境が良好であった場合でも、その僅かな生息範囲の人為的な開発行為などがあれば本種は直ちに消滅する、生息基盤の著しく脆弱な状況にある。現時点でも、過去の開発工事により生息地の中央に道路が通ったことで生息地面積が極度に減少したため、個体群が縮小している。きわめて希少な本種自体に保護の必要があるが、生息地の保全に関する対策も重要である。さらに本種は、その希少さゆえに貝類収集マニアのコレクション対象になり易く、その点でも、危機的状況にあり、絶滅危惧IA類(CR)に判断される。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 局所分布(61)

執筆:早瀬善正(株式会社東海アクアノーツ)

(情報提供:多田昭(特定非営利活動法人みんなでつくる自然史博物館・香川)・大貫貴清(東海大学))

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : NT

異種目 キセルガイ科

【貝類】

ダイトウノミギセル

日本固有種

Zaptyx daitojimana Kuroda, 1960

カテゴリー判定基準:A-2

基礎情報

ノミギセルに似るが、やや太短く薄質で、殻口が体層から離れないことで区別される。殻長 9.0mm、殻径 2.2mm、濃い茶褐色半透明で膨らみの弱い紡錘形。上板と下軸板は唇縁に出る。下板は殻口からは見えにくい。

南大東島では元々産地・個体数ともに限られていたが、2015 年の調査では古い死殻が少数採集されたのみであった。北大東島では多産地であった長幕でも大量の死殻を残して姿を消している。死殻は崖下の最後まで水分が残るような場所に集中しており、乾燥から逃れるために湿度を求めて集まり、最終的に耐えきれず死滅した可能性がある。やや新しい死殻は無数に見られたものの、生貝を全く確認できず、既に絶滅している可能性も否定できない。

随時見直しの評価理由

第 4 次レッドリスト公表後、増田ほか(2015)により危機的状況にあることが報告され、沖縄県レッドデータブック改訂にかかる実地調査(2015, 2016 年実施)でも生貝は確認できなかった。外来種ニューギニアヤリガタリクウズムシやツヤオオズアリ等による捕食の影響が懸念されるほか、死殻の産状からみると近年の過剰乾燥により死滅した可能性が高い。南大東島・北大東島いずれも 2007 年以降生息の記録はなく、最近 10 年で急速に減少したと考えられ、既に絶滅している可能性も否定できない。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 圃場整備(15-2) 草地開発(16) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) 自然災害(55) 局所分布(61)

執筆: 亀田 勇一 (国立科学博物館)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

新生種目 キバウミナナ科

【貝類】

ヌノメヘナタリ

Pirenella cancellata Ozawa & Reid, 2016

カテゴリー判定基準:B-1.2

基礎情報

殻はカワアイに似るが小形(殻長は最大で 31.2mm。カワアイは 47.6mm に達する)で細く、螺層の輪廓が直線的で、殻口後端は翼状に突出する。螺溝(らこう)が広く、螺肋(らろく)の 0.6~1.2 倍(カワアイは 0.4~0.7 倍)。

三重県伊勢湾沿岸の旧多気郡東黒部村(現松阪市)、熊本県天草市羊角湾早浦(新種記載時の基準標本の産地)、大韓民国順天湾、中華人民共和国(広西チワン族自治区の防城港市、福建省の泉州市、浙江省の舟山群島、山東省の栄成市)から知られる。亜熱帯~熱帯域で本種が見られるのは中国大陸沿岸に限られ、台湾やフィリピン等にも産出記録はない。内湾奥汽水域の砂泥干潟表層に産する。三重県の記録は 1958 年以前の標本のみで、産地の現状は不明。

随時見直しの評価理由

従来は同属のカワアイ *Pirenella pupiformis* と混同されてきたが、再検討の結果新種記載された。本州・四国・九州・南西諸島にはカワアイが広範囲に見られるのに対し、本種の国内の既知産地は三重県伊勢湾と熊本県羊角湾しかなく、そのうち近年生貝が確認されたのは羊角湾のみで、極端に生息範囲が狭く希少性の高い種である。

存続を脅かす要因

河川開発(13) 海岸開発(14) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

執筆: 福田 宏 (岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

新生物種目 クビキレガイ科

【貝類】

オカクビキレガイ

日本固有種

Truncatella oagariensis (Kuroda, 1960)

カテゴリー判定基準: B-1.3

基礎情報

クビキレガイに似るがより細く(殻長 8.5mm、殻径 3mm)、縫合の縊れは明瞭で、縦肋(じゅうろく)が少なく間隔も広い(体層に約 30 本、次体層に約 28 本)。殻表は朱色で半透明、光沢が強い。蓋は石灰化する。

北大東島と南大東島の固有種。日本産クビキレガイ科の中で最も内陸に産する種で、原記載では南大東島の「海岸から 50 乃至 300m の内陸に棲息」とされ、北大東島の現存個体群も海岸から最短で 600m の林内に見られる。広葉樹に覆われた石灰岩地の崖下の、地表に堆積した落葉下や黒色腐葉土間に産する。南大東島では 1970 年代頃までに絶滅した可能性がある。北大東島では長幕の一部(長さ約 2km)に辛うじて生存している。

随時見直しの評価理由

従来は同属のクビキレガイ *Truncatella guerinii* の異名とされてきたため長らく存在が認識されなかったが、実際は明確に識別可能な別種であり、かつ、大東諸島の固有種で、人為的要因による生息環境の減少に伴い危機的状況にある。新種記載時に産地として挙げられていた南大東島では既に絶滅した可能性が高い。近年の温暖化と過剰乾燥や、移入種ニューギニアヤリガタリクウズムシによる食害が懸念される。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 圃場整備(15・2) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 農薬汚染(32) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52・3) 自然災害(55) 局所分布(61)

執筆者: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : DD

新生物種目 クビキレガイ科

【貝類】

キザハシクビキレガイ

Truncatella sp. A

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻長約 7mm、殻径 2.9mm。殻表は淡紅色を帯びた象牙色。縦肋(じゅうろく)は太くて約 17 本と少なく、縫合下で強く角張って階段状を成す。殻底に強い縋帯(ほうたい)を巡らし偽臍孔(ぎさいこう)を形成する。蓋は石灰化する。

宮古島(久松松原、荷川取成川、島尻)、石垣島(桴海大田)、西表島の 3 島 5 カ所から知られる。内湾奥の岩礁地潮間帯上部砂泥底に半ば埋もれた転石下に見られる。まとまった量の漂着物や朽木等が堆積していない場所には個体群が形成されず、乾燥に弱いと考えられる。現存するどの個体群も小規模で、埋立や護岸等がなされると容易に失われかねない。

随時見直しの評価理由

従来は情報が少なかったため情報不足(DD)とされていたが、第 4 次レッドリスト以降の調査の結果、産地数・個体数とも極端に少ない希少種であり、人為的要因による生息環境の減少に伴って危機的状況にあることが判明した。全生息面積の合計は 0.001km²しかなく、各産地は過度に分断されている。現存する全産地も人がよく行き来する小さな浜辺や漁港の辺縁にあり、港湾拡張、防波堤増設、護岸等の環境変化や、水質悪化等が生じると短期間で絶滅する恐れがある。

存続を脅かす要因

河川開発(13) 海岸開発(14) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

執筆者: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : DD

新生種目 クビキレガイ科

【貝類】

カガヨイクビキレガイ

Truncatella sp. B

カテゴリー判定基準:B-1.2

基礎情報

殻長約 6mm、殻径 1.5mm。殻表は著しく光沢が強く、橙色～朱色(稀に白色)で半透明。縦肋(じゅうろく)は細くて間隔が狭く、体層で約 34 本に達するが、縫合下を除き平滑となる個体もある。蓋は石灰化する。

沖縄島(塩屋湾、恩納村山田、那覇港外)、宮古島(久松松原、荷川取成川、狩俣)、石垣島から知られるが、那覇港外の産地は消滅した。現存産地は 5 カ所以下で、どの個体群も小規模である。内湾奥の岩礁地潮間帯上部砂泥底に半ば埋もれた転石下に産し、水分を多く含んで崩れかけた朽木やその下の腐植土の中に深く潜る。海岸にまとまった量の漂着物や朽木等が堆積していない場所には個体群が形成されず、乾燥に弱いと考えられる。

随時見直しの評価理由

従来は情報が少なかつたため情報不足(DD)とされていたが、第 4 次レッドリスト以降の調査の結果、産地数・個体数とも極端に少ない種であり、人為的要因による生息環境の減少に伴って危機的状況にあることが判明した。全生息面積の合計は 0.001km² 以下しかなく、各産地は過度に分断されている。現存する全産地も人がよく行き来する小さな浜辺や漁港の辺縁にあり、港湾拡張、防波堤増設、護岸等の環境変化や、水質悪化等が生じると短期間で絶滅する恐れがある。

存続を脅かす要因

河川開発(13) 海岸開発(14) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61) その他(71)

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

ザルガイ目 ニッコウガイ科

【貝類】

チリメンジュロウジン

Apolymetis meyeri (Philippi, 1846)

カテゴリー判定基準:B-1.2

基礎情報

本種は奄美大島以南のサンゴ礁の内湾域において清浄な細砂礫～礫砂底に限定して記録される殻長 70mm に達する大型希少二枚貝類である。低潮線～水深 5m 付近までの清浄な細砂礫～礫砂の内湾域が生息条件と考えられる。

国内では鹿児島県奄美大島の大島海峡、焼内湾、沖縄県名護湾や羽地外海、石垣島川平湾で確認されてきたが、個体数が非常に少なく、博物館等で公式に管理されている標本は十数個体に留まると推測される。本種を含むニッコウガイ類は海底の珪藻や有機物を水管で吸引して摂餌する生態をもつ。南西諸島では、陸域開発に伴い無機質の土壌微粒子が海底において、広範囲かつ長期的に被覆し、本種の摂餌等生息環境は著しく悪化していると考えられる。

随時見直しの評価理由

1990 年代までは沖縄県名護湾や羽地外海、奄美大島加計呂麻島、焼内湾、石垣島川平湾で確認されてきたが、川平湾では 1999 年以降、名護湾、羽地外海では 2007 年以降、具体的な確認情報は無い。沖縄島大浦湾奥では 2010 年に新鮮な合弁個体が確認されている。奄美大島では 2016 年大島海峡での調査で著しく風化した死殻片が 1 個体確認されたにすぎない。よって、近年、沖縄・奄美において、確認件数が著しく減少したため、今回評価に至った。確認が困難な海域では総じて陸域からの土壌微粒子の過剰流入による底質悪化が進み、ほぼ全域で絶滅危惧リスクが大きく高まっている。現状では生息地面積 100km² 以下、分布域の大きな地理的分断、各生息海域のほぼ全域における底質環境の悪化等を勘案し、ランクが決定された。

存続を脅かす要因

河川開発(13) 海岸開発(14) 水質汚濁(31)

執筆: 久保弘文(沖縄県水産海洋技術センター)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

新生腹足目 ヤマトニシ科

【貝類】

オキナワムシオイ

日本固有種

Chamalycaeus okinawaensis Uozumi, Yamamoto & Habe, 1979

カテゴリー判定基準: B-1.3

基礎情報

沖縄島南部の石灰岩の隙間から化石として発見、記載された。現在は沖縄島北部の自然度の高い場所のみで記録される。殻径 3.9mm。次体層側は弱くくびれ、縫合下に虫様管(ちゅうようかん)を持つ。殻表の縦肋(じゅうろく)は細かく規則的だが、頸部では弱く、縫合下は更に微弱となる。

沖縄島大宜味村ネクマチヂ岳周辺の他、名護市久志大川上流や国頭村の一部から知られている。山間部の落葉溜り等に潜み、湿潤環境を好む。しかし、完全に湿気で濡れた場所では無く、落葉間が適度に湿気ていながら、隙間を維持しているような微視的環境にのみ生息する。生息場所は常に局所的で狭く、かつ個体数も少ない。

随時見直しの評価理由

既往産地が極めて少なく、沖縄島北部に大きく分散し、それぞれの生息範囲も非常に狭い。2010 年まではネクマチヂ岳山麓部でも少ないながら、落葉間から見いだされ、大保川上流でも生息地があったが、2012 年の調査では前所で僅か 1 個体、後所では全く見いだすことが出来なかった。

2015 年 11 月のネクマチヂ岳調査では終日調査にも関わらず、生貝は山頂付近部で雄 1 個体のみ確認されたに過ぎない。本種の既往産地における減少傾向や希少性、また生息記録範囲が不連続で飛び地的かつ狭小さを総合的に勘案し、生息状況はきわめて危機的状況であると考察され、今回評価に至った。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 河川開発(13) ゴルフ場(21) 土地造成(23) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

執筆: 久保弘文(沖縄県水産海洋技術センター)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

新生腹足目 アヤボラ科

【貝類】

ウネボラ

Gyrineum natator (Röding, 1798)

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻長 25mm、殻は紡錘形で背腹に扁圧され、硬質堅固、濃褐色のピロード状殻皮で覆われる。各螺層の左右両端に太い縦張肋(じゅうちょうろく)を生じる。畝状の螺肋(らろく)と縦肋(じゅうろく)が交わり、交点はイボ状となる。前管溝は明瞭。蓋は楕円形で革質。

分布の東限はニューギニア、西限はアラビア半島、南限はモザンビークのベイラで、インド洋北部(インドネシア等)に広く見られるものの、フィリピン、オーストラリア、ニューカレドニアには産しない。西太平洋では南日本周辺に限定され、かつて広く分布していた時代の遺存とされる。国内の記録も少なく、紀伊半島と、瀬戸内海の淡路島・岡山県・広島県(向島、因島)・愛媛県大三島等で報告されたのみ。潮下帯砂泥底に産する。

随時見直しの評価理由

最近まで明確な産出記録がほとんどなかったが、第 4 次レッドリスト公表以降に生息環境の概略や現状が明らかになった。2014 年に和歌山県和歌山市・日高町・串本町から生貝の産出が報告され、また 2015 年以降は岡山県倉敷市・備前市のヒメエガイ産地で継続的に複数個体が確認されている。現時点で個体群存続が確実な場所は 5 カ所程度しかない。岡山県ではナガゴマフホラダマシ、オガイ、ヒメエガイなど絶滅危惧種と同所に出現することが多いため、それらの種と同様、希少性の高い種と考えられる。

存続を脅かす要因 海岸開発(14) 水質汚濁(31) 局所分布(61) その他(71)

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

異名目 ナンパンマイマイ科

ツシマウスカワマイマイモドキ

【貝類】

Chosenelix sp.

カテゴリー判定基準: B-1.3

基礎情報

殻径 15mm 前後、蝸牛形、淡黄色半透明で薄い。中国・九州地方等に分布するコハクオナジマイマイ *Bradybaena pellucida* と混同されてきたが、生時、中腸腺が鮮明な檸檬色を呈する点は共通するものの、殻がより強く膨らみ、また外套膜縁に褐色斑を散在すること等で識別される。未記載種。

長崎県対馬の固有種。同島の佐須奈、比田勝、仁田、三根、阿須、中原、仁位、峰、巖原から文献記録がある。日当たりと風通しの良い草原地に特有で、主として道路脇や河川敷などに生じたカラムシやクズなどの優占する雑草帯に見られる。森林内には産しない。1974、1998 年の調査では島内各所に多産が確認されていたが、2015 年 8 月に個体群が見出されたのは美津島町洲藻のみで、21 世紀に入って急激に減少している。

随時見直しの評価理由

対馬固有種で、第 4 次レッドリスト以降の調査の結果、急激な減少傾向にあることが判明した。草原・道路脇・河川敷等に生じる雑草帯に生息するため、河川・草地開発、圃場整備、土地造成、道路建設、農薬汚染等が個体群存続に悪影響を与えている。また温暖化の影響で過剰乾燥が生じていることも激減の一因と考えられる。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 河川開発(13) 圃場整備(15-2) 草地開発(16) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 農薬汚染(32) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 競争(外来種による)(56-1) 局所分布(61)

執筆著者: 福田 宏(岡山大学大学院)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

異名目 ナンパンマイマイ科

アキラマイマイ

【貝類】

日本固有種

Satsuma akiratadai Kameda & Fukuda, 2015

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻長約 12mm、殻径約 17mm、殻は蝸牛形、褐色、周縁に濃色帯を巡らす。殻ではシメクチマイマイと識別困難であるが、後種は生殖器の鞭状器(べんじょうき)先端が細まって鉤状に彎曲するのに対し、本種は太く単純な棍棒状である。

岡山県南部の 5 市 1 町(岡山・倉敷・玉野・浅口各市、早島町、笠岡市北木島)及び香川県塩飽諸島・荘内半島先端に分布が限定され、備讃地方(瀬戸内海中央部沿岸域と離島)の固有種である。分布域の大半は、人類によって 6 世紀頃に干拓が開始される以前は離島であった場所である。対照的に本種の姉妹種シメクチマイマイはもともと陸地であった場所に主として分布する。両種とも、里山の広葉樹林辺縁斜面下部の落葉間に棲息する。

随時見直しの評価理由

従来は同属のシメクチマイマイ *Satsuma ferruginea* と混同され、存在が認識されていなかったが、実際は生殖器の形態で明確に識別可能な別種であり、岡山県南部と香川県島嶼部の約 50km² に固有で、シメクチマイマイより分布域が遥かに狭い。両種とも、都市化に伴う森林縮小によって減少傾向にある。また竹林は生息に適さないため、近年の里山の管理放棄によって進行する急速な竹林拡大も本種の個体群維持に悪影響を与えている。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 海岸開発(14) 圃場整備(15-2) 草地開発(16) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 農薬汚染(32) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54) 競争(在来種による)(56-2) 局所分布(61)

執筆著者: 福田 宏(岡山大学大学院)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : NT

異名目 ナンパンマイマイ科

【貝類】

ヨナクニマイマイ

日本固有亜種

Satsuma caliginosa picta (Pilsbry & Hirase, 1909)

カテゴリー判定基準:A-2

基礎情報

殻は殻径約 28mm 前後、螺塔はやや低く、体層周縁は丸い。成貝の殻口は横長の楕円形、底唇部はやや直線的で、わずかに内側に張り出して突起を形成する。系統的には中琉球産のシュリマイマイ類ではなく、台湾産のドングリマイマイ類に近縁である。

与那国島中央部の自然林一帯には広く分布しているが、個体群密度はかなり低下している。2000 年代中頃までは、夜間調査で多数の個体が這い出ているのが確認できていたが、2015 年調査時にはごく少数の個体しか観察されなかった。また、生息地の大半には同属の外来種であるシュリマイマイやミヤコマイマイが侵入しており、影響が懸念される。

随時見直しの評価理由

2000 年代中頃までは、夜間調査で多数の個体が這い出ているのが確認できていたが、第 4 次レッドリスト検討時よりも後に行われた沖縄県レッドデータブック改訂にかかる実地調査(2015 年実施)ではごく少数の個体しか確認できず、与那国島全域で個体群密度が低下している可能性が高いと判断された。近年の開発や過剰乾燥の影響のほか、生息地の大半に同属の外来種であるシュリマイマイやミヤコマイマイが侵入しており、影響が懸念される。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 草地開発(16) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) 自然災害(55) 競争(外来種による)(56-1)

執筆: 亀田勇一(国立科学博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

異名目 ナンパンマイマイ科

【貝類】

シラユキヤマタカマイマイ

日本固有種

Satsuma largillierti (Pfeiffer, 1849)

カテゴリー判定基準:B-1.2

基礎情報

殻径 17~29mm、螺塔のやや高い円錐形で、殻頂は鈍い。通常淡黄白色の地色で無帯または周縁に 1 本の色帯を持つ。殻ではオキナワヤマタカマイマイと区別が難しいが、生殖器各部の肥厚が弱く、陰茎が長く、陰茎本体と鞭状器(べんじょうき)が短いことで区別される。

沖縄島(那覇市~西原町~中城村以南を除く)、平安座・宮城・伊計・瀬底・伊江・屋我地・古宇利の各島および沖永良部島に分布する。人口の多いうるま市以南では宅地・墓地等の建設により森林面積が減少している。2000 年代前半までは一度の調査で多数の個体を確認できる場所が多かったが、2010 年以降の調査では一様に生息密度が低下している。また、道路拡張をはじめとする林縁部の開発や、枝打ちによる個体群の縮小も確認されている。

随時見直しの評価理由

実際に分類が変更されたのは 2008 年であるが、第 4 次レッドリスト検討時の資料からは生息の実態が十分認識されていない可能性があるため、随時見直しによる評価を行った。本種は近縁なオキナワヤマタカマイマイとは異なり、低標高地の林縁部を中心に生息する。この傾向は国頭地方では特に顕著であるため、生息地面積は総森林面積よりも圧倒的に小さいうえ、林縁部の枝打ちや下草刈り、小規模な開発の影響を受けやすい。都市部や近郊の小規模な林にも生息するが、特にうるま市以南では開発による伐採に伴って個体群の縮小・消滅が著しい。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 海岸開発(14) 石灰開発(17) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) 捕食(在来種による)(52-4) 自然災害(55)

執筆: 亀田勇一(国立科学博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : DD

異名目 ヒラマキガイ科

【貝類】

ヒメヒラマキミズマイマイ

日本固有種

Gyraulus pulcher (Mori, 1938)

カテゴリー判定基準:B-1.2

基礎情報

殻径 2mm 前後。殻は円盤状で左巻、殻頂は多少窪む。薄質、半透明の淡黄色。ヒラマキミズマイマイに似るがより小型で、殻径に対して殻長が小さく、螺管の巻きが密で、螺管は殻口附近でも広がらない点で識別できる。

青森・宮城・山形・茨城・長野・岐阜・愛知・滋賀・兵庫・岡山・香川・高知・長崎・沖縄各県と東京都島嶼部から確認され、山口県秋吉台コジキ穴からは化石の産出報告がある。低地の用水路や池沼、湿原など緩やかな流水または止水中の非還元的環境に見られ、水面より僅かに上の植物の茎や濡れた地表に堆積した落葉などに付着する。大半の産地は小規模な池沼や溝渠等の辺縁に見られ、生息地面積が 1km² を上回る場所は知られていない。

随時見直しの評価理由

従来は情報不足(DD)とされていたが、第4次レッドリスト以降の調査の結果、汚水や農薬の流入がなく、護岸等の人為的改変もない湿原に特異的で、ヒラマキガイ科貝類の中でも特に脆弱な陸水環境に限定されることが判明した。近年も比較的広範囲で生息が確認されているが、産地数は各県に1~数カ所程度で、それぞれの生息範囲も極めて狭く、相互に孤絶している。高度経済成長期以後の低地の急速な開発によって、生息場所の大半が失われている。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 河川開発(13) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 草地開発(16) ゴルフ場(21) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : NT

新生種目 ヤマトニシ科

【貝類】

ヒラセアツブタガイ

日本固有種

Platyrhaphe hirasei hirasei (Pilsbry, 1901)

カテゴリー判定基準:B-1.2

基礎情報

最大殻径 11mm に達する平巻状の白い殻と石灰質の厚い蓋を持つ。生時には貝殻に泥を付着させてカモフラージュする。降雨時には石灰岩上で殻を立てて匍匐し、乾燥時には石灰岩礫と落葉の間隙で休眠する。

沖縄島南部全域、中部では恩納村南部、沖縄市、うるま市等の石灰岩地に産地が点在するが、2010年以降では極めて確認事例が少なく、特に沖縄島南部では激減している。主要分布域である沖縄島中南部は広大な石灰岩地が広がっているが、宅地や墓地等の造成により直接的な生息場所の破壊が進行し、城趾や古いウタキ周辺の森のみで生きながらえている状況である。

随時見直しの評価理由

沖縄島中南部における生息地は住宅や墓地等建設により、森林伐採が継続しており、一部のグスクやウタキ等僅かな面積に留まっている。沖縄島北部では大宜味村 63カ所(2012年)及び名護市全域 108カ所(2013~2015年)の調査では生息が確認できず、恩納村では全域 68カ所中 5カ所のみで、その範囲もおおよそ 4km² 以下に留まっていた(久保, 2012; 久保, 2014; 久保, 2017)。久米島では 2013年には気象観測史上最大規模の干ばつに見舞われ、平地部においては、2015年調査では極めて少なく、山間部においても減少傾向にある(久保, 未発表)。現在、その生息範囲は大きく見積もっても 40km² 以下と推定され、生息状況もほぼ全域で悪化している。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 遷移進行・植生変化(54)

執筆: 久保弘文(沖縄県水産海洋技術センター)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

新生種目 イモガイ科

【貝類】

ベッコウイモ

Conus fulmen Reeve, 1843

カテゴリー判定基準:B-1.2

基礎情報

殻長 70mm。殻は倒円錐形で厚く、螺塔はやや高まり、殻表は薄紫色で、体層表面に紫黒色の雲状縦斑が広がる。縫合面は螺条(らじょう)を巡らし、放射状の暗褐色斑で彩られる。蓋はごく小さく、縦長の楕円形で厚い革質。

房総半島／男鹿半島～九州、韓国、台湾に分布し、南西諸島には産しない。亜熱帯・熱帯に大半の種を擁するイモガイ科の種としては数少ない温帯系種である。潮間帯下部～水深 50m までの岩礁間の砂底に潜る。最近 5 年間の確実な生貝の産出記録は、長崎県佐世保市九十九島の 3 地点(枕島西岸沖水深 5-6m、高島南東岸沖 35m、黒島町名切 5m)などわずかしかない。他の多くの産地では、近年は摩滅や破損が著しい死殻が僅かに見られるのみ。

随時見直しの評価理由

従来は普通種とされ、日本の主要な貝類図鑑にも図示されてきたが、1970 年代末以降に各地で激減が報告され、かつて高頻度で海岸に打ち上げられていた死殻も滅多に見られなくなった。第 4 次レッドリスト以降の 2015 年に長崎県九十九島から生貝が報告され、これは近年唯一の確実な産出記録である。またそれらの生貝はインポセックス(内分泌攪乱物質による不妊化)を発症しており、これが全国で急減した最大の要因である可能性が初めて明確に指摘された。

存続を脅かす要因 海岸開発(14) 水質汚濁(31)

執筆者:福田 宏(岡山大学大学院)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

新生種目 エソバイ科

【貝類】

ナガゴマフホラダマシ (ゴマフホラダマシ)

日本固有種

Engina menkeana (Dunker, 1860)

カテゴリー判定基準:B-1.2

基礎情報

殻長 10mm。殻は硬質堅固な紡錘形。太い縦肋(じゅうろく)の上に細い螺肋(らろく)が乗り、交点は横長の疣状となる。縦肋は黒色だが肋間は白く、周縁に白い螺状色帯を巡らす。殻口外唇内側に歯状突起を縦に数個並べる。蓋は小さく革質。

房総半島／七尾湾～九州南部に分布し、現時点で国外の確実な記録はない。内湾湾口部や海峡部など潮通しが良く透明度の高い海水に洗われる海岸の潮間帯～潮下帯の岩礁や礫地において、礫間や転石下のやや還元的な間隙に産し、クロマキアゲエビス、アシヤガイ、ウネボラ、オガイ、ヒメエガイ、クロヒメガキ、コケゴロモ、タガソデモドキ等と共に独特の貝類群集を形成する。高密度で産する場所もあるが、大半の産地では個体数は少ない。

随時見直しの評価理由

最近まで明確な産出記録が少なかったが、第 4 次レッドリスト以降に生息環境の概略や現状が明らかになった。最近 10 年間で千葉県館山湾、東京都伊豆大島、静岡県伊豆半島、和歌山県紀伊半島南部、兵庫県淡路島、岡山県倉敷市、香川県高松市屋島、徳島県阿南市、大分県佐伯市大入島、熊本県天草市大矢野島等約 10 カ所から生貝が記録された。特に岡山・香川両県ではウネボラ、オガイ、ヒメエガイなど絶滅危惧種と随伴し、それらの種と同様、希少性の高い種と考えられる。

存続を脅かす要因 海岸開発(14) 水質汚濁(31) 局所分布(61) その他(71)

執筆者:福田 宏(岡山大学大学院)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

異名目 カノキセワタ科

【貝類】

エゾキセワタ

Melanochlamys ezoensis (Baba, 1957)

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

体長 4~13mm。円筒形のウミウシ状で、灰褐色の体表に暗色の斑点を散在する。頭楯は長方形で体長の半分を占め、内臓部の後端は左右に短く二分される。殻は内在し、逆三角形で、後方左側が深く彎入する。

同定が確定した個体は北海道(厚岸、温根沼)、本州(千葉県勝浦)、ピョートル大帝湾、サンフランシスコ湾(人為的移入)から記録され、北日本~ロシア日本海沿岸の冷帯~温帯域を中心に分布するとみられるが、房総半島明鐘岬、伊豆半島大瀬崎、若狭湾、淡路島、高知県でも本種と同種の可能性のある生体写真が公表されている。干潟下部から漸深海底(水深 0.5~60m)の砂泥底または砂底に潜行する。

随時見直しの評価理由

従来は情報の少なから評価対象外とされていたが、第4次レッドリスト以降の検討の結果、分類上の位置や分布の概略が明らかになった。近縁種ヤミヨキセワタよりさらに記録例が少なく、現時点で確実な産地は北海道厚岸と温根沼、千葉県勝浦のみで、未確定ながら同種の可能性のある個体の産地も5カ所に限られ、それらを加えても1道5県8カ所からしか知られていない。北海道温根沼ではヤミヨキセワタとの同所的な産出が確認されていることも踏まえ、今回この両種を同時に評価した。

存続を脅かす要因 海岸開発(14) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) 水質汚濁(31) 自然災害(55) 局所分布(61)

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : DD

異名目 カノキセワタ科

【貝類】

ヤミヨキセワタ

Melanochlamys fukudai Cooke, Hanson, Hirano, Ornelas-Gatdula, Gosliner, Chernyshev & Valdés, 2014

カテゴリー判定基準: B-1.2

日本固有種

基礎情報

体長 3~11mm。軟体・殻ともにエゾキセワタに似るが、体表全体が黒紫色または暗褐色で斑点を欠き、また頭楯中央に濃色の縦条が走る点で識別できる。殻の後方左側の彎入は浅い。両種は生殖器雄性部の形態も異なる。

既知産地は北海道温根沼、宮城県蒲生干潟、福島県相馬市松川浦、千葉県木更津市小櫃川河口、神奈川県三浦市江奈湾・相模湾、愛知県三河湾汐川干潟・一色干潟、三重県伊勢湾、山口県秋穂湾の1道6県10カ所。大阪湾と岡山県児島湾でも類似個体が得られているが同定は未確定。内湾奥砂泥干潟中~下部の底泥中に潜行し、夜間~早朝に表層を匍匐する。東京湾奥(江戸川放水路、三番瀬、お台場)での記録は *Melanochlamys kohi* の移入個体群。

随時見直しの評価理由

従来は種名が確定できず、在来の希少種か外来種か、単一種か複数種を含むかも不明であったため情報不足(DD)とされていたが、第4次レッドリスト以降の検討の結果、新種記載された。国内の個体群間に比較的高い遺伝的多様性が認められるため、在来種と考えられる。国外では未確認(朝鮮半島には別種 *Melanochlamys kohi* が産する)で、日本固有種の可能性がある。大半の産地では個体数は少なく、生息密度も低い。また、福島県松川浦では東日本大震災の津波によって個体群が大打撃を受けた。

存続を脅かす要因 海岸開発(14) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) 水質汚濁(31) 自然災害(55) 局所分布(61)

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

新生種目 キバワミミナ科

【貝類】

ヤエヤマヘナタリ

Pirenella asiatica Ozawa & Reid, 2016

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻はヘナタリに酷似するがやや小型(殻長 27mm 未満。ヘナタリは 30mm に達する)で細い。螺層の 3 本の螺肋(らろく)のうち縫合下のものが最も太く、そのすぐ下の螺肋の 2 倍の幅を持つ。殻口外唇の肥厚はヘナタリより弱い。

八重山諸島の石垣島(川平湾、仲良川河口)、西表島(古見、船浦:新種記載時の基準標本の産地)、中国南部、台湾、ベトナム、シンガポールに分布する。八重山諸島は本種の世界的北限かつ日本唯一の産地である。沖縄県ではカワアイがほぼ全域、ヘナタリが沖縄島のみ産するのに対し、本種は石垣・西表両島にしか知られず、宮古諸島でも記録はない。一部の産地では今も個体数は少なくないが、今後の環境変化によって急減するおそれがある。

随時見直しの評価理由

従来は同属のヘナタリ *Pirenella nipponica* と混同されてきたが、再検討の結果新種記載された。本州・四国・九州・沖縄島にはヘナタリが広範囲に見られるのに対し、本種の国内の既知産地は八重山諸島の石垣島・西表島しか存在しない。生息環境は護岸や埋立、ダム建設による河川流路変更と河床堆積物の変化、水質汚濁等によって年々悪化しているため、本種の個体群も継続的な減少が予測される。

存続を脅かす要因

河川開発(13) 海岸開発(14) 湿地開発(15-1) スキー場(22) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55)

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

新生種目 クビキレガイ科

【貝類】

アマミクビキレガイ

Truncatella sp. C

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

クビキレガイより小型(殻長 8mm、殻径 3mm)で、縦肋(じゅうろく)は太く、数が少ない(体層に約 24 本、次体層に約 21 本)。蓋は石灰化する。学名を *Truncatella amamiensis* とするのは誤りである。

奄美大島、加計呂麻島、徳之島、伊平屋島、沖縄島、座間味島、慶留間島、渡名喜島、久米島、栗国島、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島から知られる。内湾奥～湾口に面した岩礁地飛沫帯において、砂泥底転石下に見られ、クビキレガイ出現範囲より海寄りの、保湿された環境に産する。一部の産地ではクビキレガイに随伴するが、産地数・個体数とも遥かに少なく、どの島でも産地は 1～数カ所に限られ、既知産地は合計 20 カ所以下。

随時見直しの評価理由

従来は同属のクビキレガイ *Truncatella guerinii*(= *Truncatella amamiensis*) の異名とされてきたため長らく存在が認識されなかったが、実際は明確に識別可能な別種である。クビキレガイより産地数・個体数とも少なく、港湾拡張、防波堤増設、護岸等の人為的要因による生息環境の減少に伴って危機的状況にある。

存続を脅かす要因

河川開発(13) 海岸開発(14) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55) 局所分布(61)

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

異種目 ナンバンマイマイ科

【貝類】

チョウシュウシロマイマイ

日本固有種

Aegista hirosifukudai Hirano, Kameda & Chiba, 2015

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻長約 13mm、殻径約 15mm。殻は円錐形、白色で殻底に幅広い紫褐色帯を巡らす。キュウシュウシロマイマイやコウダカシロマイマイとは螺塔が著しく高い点で識別される。樹上性で、地表から 3m 程度まで樹幹に登る。

山口県東部(長門・美祢・山口・萩・防府・周南・下松・岩国・光・柳井各市、阿武・田布施・平生・上関・周防大島各町)、広島県西部(廿日市・呉・三原各市、安芸太田町)、島根県西部(益田市・津和野町)、愛媛県東部(西条・今治・松山・東温各市、久万高原・内子両町)に固有。低地の里山から山間部の、日当たりと風通しの良い斜面に生じた広葉樹林や竹林に産する。針葉樹林には見られず、広葉樹林の維持が個体群存続に必須である。

随時見直しの評価理由

従来は同属のキュウシュウシロマイマイ *Aegista eumenes* やコウダカシロマイマイ *Aegista cretacea* との関係が不明瞭であったが、DNA 塩基配列の解析の結果新種記載された。山口・島根・広島・愛媛各県の固有種。自然林伐採やスギ・ヒノキ等針葉樹の植林によって生息環境が近年急速に狭められている。樹上性のため広葉樹への依存度が上記 2 種より高く、それらより存続基盤が脆弱である。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) ゴルフ場(21) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 農薬汚染(32) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

執筆者: 福田 宏(岡山大学大学院)

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : NT

異種目 オナジマイマイ科

【貝類】

ミヤケチャイロマイマイ

Phaeoherix miyakejimana (Pilsbry & Hirase, 1903)

削除理由

2014 年にタメトモマイマイ *Bradybaena phaeogramma phaeogramma* の同物異名(シノニム)であることが論文で報告されており(Hirano et al., 2014)、この見解に基づき、ミヤケチャイロマイマイとされる個体群はタメトモマイマイに含まれるためレッドリスト 2017 では本種を削除した。

なお、タメトモマイマイは南西諸島に比較的広く分布し、まれではない種であることから、レッドリスト 2017 には掲載されていない。

【その他無脊椎動物】

■補遺資料掲載種一覧

※RL2017 カテゴリーごとに掲載

和名		学名		RL カテゴリー	
RL2015 (旧)	RL2017	RL2015 (旧)	RL2017	2015	2017
—	クロウサギチマダニ	—	<i>Haemaphys pentalagi</i>	—	EN
—	オガサワラクロベンケイガニ	—	<i>Chiromantes magnus</i>	—	VU

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

節足動物門 クモガタ綱 ダニ目 マダニ科

【その他無脊椎動物】
日本固有種

クロウサギチマダニ

Haemaphysalis pentalagi Pospelova-Shtrom, 1935

カテゴリー判定基準: B-1, 2, 3

基礎情報

アマミノクロウサギに特異的に寄生する。小型種で、触肢第 2 節の後縁は上反して後外角は強く突出し、脚基部の棘は極めて短小。種々の疾患及び病原菌等の媒介能は知られていない(高田, 1990)。

奄美大島と徳之島のアマミノクロウサギの生息地域にのみ分布。実際には、湯湾岳周辺など極限られた地域に分布。宿主であるアマミノクロウサギの個体数減少、地域的な絶滅により、本種の存続も脅かされている。また、奄美大島では 1979 年前後に移入されたといわれるジャワマングース *Herpestes javanicus* が分布を拡大しており、捕食者として脅威となっている。このほか、野犬も捕食者として知られる。(レッドデータブック 2014(哺乳類)p. 56, 「アマミノクロウサギ」参照。https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/哺乳類_031.pdf)

随時見直しの評価理由

アマミノクロウサギに特異的に外部寄生するダニ類(ツツガムシ類: ナカヤマタマツツガムシとクロウサギワルヒツツガムシ)は、既に第 4 次レッドリストにおいて評価が行われ、絶滅危惧 I 類(CR+EN)として掲載されている。本種(マダニ類)も、これら 2 種と生息現況は同じであると考えられ、早急に評価する必要があることから随時見直しによる評価を行った。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 河川開発(13) 道路建設(24)

執筆: 島野智之(法政大学)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

節足動物門 軟甲綱 十脚目 ベンケイガニ科

【その他無脊椎動物】
日本固有種

オガサワラクロベンケイガニ

Chiromantes magnus Komai & Ng, 2013

カテゴリー判定基準: A-2 B-1, 2

基礎情報

本種は小笠原諸島固有種である。甲幅は 50mm に達し、近縁のクロベンケイガニよりも大型になる。川岸に巣穴を掘って生活する。内湾流入河川下流域に集団生息地を形成するが、父島では標高 200m を超える台地上の源流域に生息する個体もみられる。

小笠原諸島の父島と母島の 2 島のみに分布し、周辺属島では調査が行われているにもかかわらず記録が無い。父島では複数の水系に分布するが、母島では 1 水系のみが知られる。主な生息域は内湾に流入する河川の下流域であるため、港湾地域や集落地域と重なっている。近年、父島と母島の主要な河川では、戦前につくられた石積み護岸からコンクリート護岸へ改修が進められてきた。コンクリート護岸化によって本種は川岸に巣穴を形成できなくなり、急速に生息域が失われた。なお、本種は父島において最もロードキル事例の多い在来種であり、影響が懸念されるため定量的な把握が必要である。

随時見直しの評価理由

最近になって新種記載された事、狭い範囲に分布が限られる事、攪乱を受けやすい環境に生息していることから、早急な評価が必要となった。本種はこれまで日本各地に生息するクロベンケイガニ *Chiromantes dehaani* の地域個体群と考えられてきた。しかし、分類学的再検討がなされ、2013 年に小笠原諸島の固有種として新種記載された(Komai and Ng, 2013)。本種は小笠原諸島の父島と母島の 2 島のみに分布する。生息環境は、主に内湾流入河川の下流域であり、港湾地域や集落地域と重なっており、環境攪乱の影響を受けやすい。

存続を脅かす要因 河川開発(13) 海岸開発(14) 交通事故(26)

執筆: 佐々木哲朗(特定非営利活動法人小笠原自然文化研究所)

【維管束植物】

■補遺資料掲載種一覧

※RL2017 カテゴリーごとに、学名アルファベット順に掲載

和名		学名		RL カテゴリー	
RL2015 (旧)	RL2017	RL2015 (旧)	RL2017	2015	2017
コバヤシカナワラビ	コバヤシカナワラビ	<i>Arachniodes yasui-inoueii</i> var. <i>angustipinnula</i>	<i>Arachniodes yasui-inoueii</i> var. <i>angustipinnula</i>	EX	EW
ホソスゲ	ホソスゲ	<i>Carex disperma</i>	<i>Carex disperma</i>	EX	CR
ヒュウガホシクサ	ヒュウガホシクサ	<i>Eriocaulon seticospe</i>	<i>Eriocaulon seticospe</i>	EX	CR
—	ミクラジマトウヒレン	—	<i>Saussurea mikurasimensis</i>	—	CR
オオアオガネシダ	削除	<i>Asplenium austrochinense</i>	削除	EX	削除

EW

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : EX

シダ植物 オシダ科

【維管束植物】

コバヤシカナワラビ

Arachniodes yasui-inouei var. *angustipinnula*

カテゴリー判定基準: —

基礎情報

レッドデータブック 2014(維管束植物)p. 4.を参照。

https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/植物 I_002.pdf

随時見直しの評価理由

1976年に採集された標本に基づいて、2009年に新変種として記載された分類群である。基準産地以外では知られておらず、その地点は採集後森林が伐採されて、記載時点で既に自生が再確認できない状態であった。

栽培株も知られていなかったことから絶滅種とされたが、その後栽培株の存在が確認された。

存続を脅かす要因 園芸採取(41)、シカ食害(52-1)、森林伐採(11)

執筆者: 日本植物分類学会

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : EX

被子植物 カヤツリグサ科

【維管束植物】

ホソスゲ

Carex disperma

カテゴリー判定基準: D

基礎情報

林中の湿原に生える多年草。細長い匍枝があり、茎は高さ20-50cm。葉は幅1-1.5mm。小穂は3-5個あって、まばらにつき、長さ2-3mm、頂部に1-4個の雄鱗片、下方に1-4個の果胞をつける。果胞は淡緑黄色で光沢があり、卵形で厚いレンズ形、長さ2.5-3mm、6-7月に熟す。

随時見直しの評価理由

日本では Faurie(1892-1893年)による北海道厚岸と小山鐵夫(1954年)による猿払の採集記録があったが、その後の探索にもかかわらず確認できず絶滅種とされてきた。2016年6月に厚岸町門静において生育が確認され、およそ60年振りの再発見となった。生育地は Faurie の採集地からそれほど遠くない場所と推定される。生育環境は標高2mほどの平坦地に成立したアカエゾマツ林で、林床にはカブスゲの谷地坊主(やちぼうず)が密生していた。ホソスゲは径30-50cmの塊を作って生育し、50×50mほどの範囲に50-60株が確認された。発見されて間もないため、個体群が増加傾向にあるのか、減少傾向にあるのかは不明であるが、生育地が1ヶ所で、非常に狭い範囲に限られるため、生育基盤が消失すると絶滅する可能性が高く、絶滅危惧 I A 類(CR)と評価した。

存続を脅かす要因 不明(99)

執筆者: 日本植物分類学会

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : EX

被子植物 ホシクサ科

【維管束植物】

ヒュウガホシクサ

Eriocaulon seticuspe

カテゴリー判定基準:D

基礎情報

1年草。草丈 5~12 cm、ホシクサに似て、葉は束生し、線形で3脈がある。総苞片が披針形でやや厚く、先が芒状に長く尖り、雌花の萼片は舟形で背部に狭い翼があるので区別できる。日本固有種とされてきたが、近年、中国からインドにかけて分布する *Eriocaulon echinulatum* と同一種の可能性が指摘され、今後の分類学的研究によって学名が変更される可能性がある。その場合は隔離分布の東限となる。

随時見直しの評価理由

本種は約 50 年間にわたり生育が確認されず、絶滅したと考えられていたが、近年、宮崎県児湯郡川南町の湿原において自生が確認され、再評価を行った。湿原の保全整備作業によって生育環境が復元され、50 年以上にわたって休眠していた埋土種子が発芽したものと考えられる。現在、本種の生育範囲は極めて限定的であり個体数も少ない。現地では保全活動が行われているが、絶滅の危険性が高いと判断し、絶滅危惧 I A 類(CR)に選定した。

存続を脅かす要因 園芸採取(41) 自然遷移(54)

執筆: 日本植物分類学会

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : なし

被子植物 キク科

【維管束植物】

ミクラジマトウヒレン

Saussurea mikurashimensis

カテゴリー判定基準:D

基礎情報

高さ 40-55cm の多年草。茎は狭い翼があるかまたはなく、上部で 2-5 回分枝する。根出葉は花時には生存しない。下部の茎葉の葉身はやや厚く肉質で、卵状心形、長さ 10-14cm、幅 8-10cm、葉柄はふつう長さ 9-13cm、ときに 30cm に達する。花は 10-11 月。頭花は 4-7 個が散房状に密集してつき、径約 10mm。総苞は狭筒形、径 5-6mm、緑色。総苞片は 8-9 列、肉質で鈍い光沢があり、外片は卵形、長さ 3mm。花冠は長さ 8mm、淡い紅紫色。元々、富士山周辺に分布するヤハズヒゴタイの変種として記載されたが、東アジア産のトウヒレン属では本種以外に知られていない特徴があり、独立種として記載された。

伊豆諸島の御蔵島の特産であり、常緑広葉樹林の林床に生育する。

随時見直しの評価理由

2010 年の調査では、山麓部の一ヶ所で 1 株が確認されたに過ぎなかった。最近、さらに数株が見つかった。成熟個体数が数株であると推定され、生育状況が極めて危機的な状況であることから、絶滅危惧 I A 類(CR)と評価した。

存続を脅かす要因 自然遷移(54) 産地局限(61)

執筆: 日本植物分類学会

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2015) : EX

シダ植物 チャセンシダ科

【維管束植物】

オオアオガネシダ

Asplenium austrochinense

削除理由

本種として報告された琉球列島の標本は、アオガネシダ *Asplenium wilfordii* であると確認されたことから(海老原, 2016)、日本にはもともとオオアオガネシダは分布していなかったと判断し、レッドリスト 2017 において本種を削除することとした。

なお、アオガネシダは本州(伊豆諸島・関東地方以西)・四国・九州・琉球列島(沖縄島以北)に分布し全国的にはまれな種ではないことから環境省レッドリストには掲載されていない。

【参考文献】

- Alström, P., T. Saitoh, D. Williams, I. Nishiumi, Y. Shigeta, K. Ueda, M. Irestedt, M. Björklund and U. Olsson, 2011. The Arctic Warbler *Phylloscopus borealis* – three anciently separated cryptic species revealed. *Ibis*, 153 (2): 395-410.
- Dong, L., M. Wei, P. Alstrom, X. Huang, U. Olsson, Y. Shigeta, Y. Zhang and G. Zheng, 2015. Taxonomy of the Narcissus Flycatcher *Ficedula narcissina* complex: an integrative approach using morphological, bioacoustics and multilocus DNA data. *Ibis*, 157 (2): 312-325.
- 海老原 淳, 2016. 日本産シダ植物標準図鑑 I, p. 411. 学研プラス, 東京.
- Hirano, T., Y. Kameda and S. Chiba, 2014. Phylogeny of the land snails *Bradybaena* and *Phaeohelix* (Pulmonata: Bradybaenidae) in Japan. *Journal of Molluscan Studies*, 80: 177-183.
- Komai, T. and Ng, P. K. L., 2013. A new species of sesarimid crab of the genus *Chiromantes* (Crustacea: Decapoda: Brachyura) from the Ogasawara Islands, Japan. *Zootaxa*, 3681(5): 539-551.
- 久保弘文, 2012. 陸生貝類調査. “平成 23 年度地域生物多様性保全計画 (大宜味村地域連携保全活動計画) 策定調査業務報告書”. 環境省・大宜味村 (編), pp. 56-64. 環境省・大宜味村, 大宜味.
- 久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第 1 巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), pp. 245-340. 恩納村役場, 恩納.
- 久保弘文, 2016. 宮古諸島における陸産貝類相の現状と課題. 日本貝類学会平成 28 年度大会研究発表要旨集, p. 23.
- 久保弘文, 2017. 陸産貝類. “名護市史 自然編”, 名護市史編さん委員会 (編), 名護市教育委員会, 名護. 印刷中.
- 増田修・宇野明・中原ゆうじ, 2015. 沖縄県大東諸島の陸産貝類の現状. *かいなかま*, 49: 21-44.
- Nakajima J., 2012. Taxonomic study of the *Cobitis striata* complex (Cypriniformes, Cobitidae) in Japan. *Zootaxa*, 3586: 103-130.
- 日本鳥学会, 2012. 日本鳥類目録改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田. 438pp.
- 岡山健仁・千葉昇, 1995. 愛媛県重信町阿歌古溪谷で発見されたハコネサンショウウオ. *愛媛の自然*, 37: 13-14.
- 齋藤武馬・西海功・茂田良光・上田恵介, 2012. メボソムシクイ *Phylloscopus borealis* (Blasius) の分類の再検討: 3 つの独立種を含むメボソムシクイ上種について. *日本鳥学会誌*, 61: 46-59.
- 齋藤武馬・茂田良光・上田恵介, 2014. メボソムシクイ上種 3 種の外部形質を用いた識別方法. *日本鳥類標識協会誌*, 26: 45-61.
- Saitoh, T., N. Sugita, S. Someya, Y. Iwami, S. Kobayashi, H. Kamigaichi, A. Higuchi, S. Asai, Y. Yamamoto and I. Nishiumi, 2014. DNA barcoding reveals 24 distinct lineages as cryptic bird species candidates in and around the Japanese Archipelago. *Molecular Ecology Resources*, 15: 177-186.
- 高田伸弘, 1990. 病原ダニ類図譜, 金芳堂, 京都. 216pp.
- 吉川夏彦, 2015a. 最近の日本産ハコネサンショウウオ属の分類に関する雑記. *両生類誌*, 27: 1-8.
- 吉川夏彦, 2015b. 只見町に生息するタダミハコネサンショウウオについて. *只見の自然 只見町ブナセンター紀要*, 4: 2-6.

- Yoshikawa, N. and M. Matsui, 2014. Two new salamanders of the genus *Onychodactylus* from eastern Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). *Zootaxa*, 3866: 53-78.
- Yoshikawa N., M. Matsui and K. Nishikawa, 2012. Genetic structure and cryptic diversity of *Onychodactylus japonicus* (Amphibia, Caudata, Hynobiidae) in northeastern Honshu, Japan, as revealed by allozymic analysis. *Zoological Science*, 29: 229-237.
- Yoshikawa N., M. Matsui, K. Nishikawa, JB. Kim and A. Kryukov, 2008. Phylogenetic relationships and biogeography of the Japanese clawed salamander, *Onychodactylus japonicus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its congener inferred from the mitochondrial cytochrome *b* gene. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 49: 249-259.
- Yoshikawa N., M. Matsui, K. Nishikawa, Y. Misawa and S. Tanabe, 2010. Allozymic variation in the Japanese clawed salamander, *Onychodactylus japonicus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), with special reference to the presence of two sympatric genetic types. *Zoological Science*, 27: 33-40.
- Yoshikawa N., M. Matsui, S. Tanabe and T. Okayama, 2013. Description of a new salamander of the genus *Onychodactylus* from Shikoku and western Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). *Zootaxa*, 3693: 441-464.
- Yoshimura, M., S. Hosoishi, Y. Kuboki, K. Onoyama and K. Ogata, 2009. New synonym and new Japanese record of the ant genus *Ponera* (Hymenoptera: Formicidae). *Entomological Science*, 12: 194-201.

環境省レッドリスト 2017 補遺資料

平成 29 年 10 月

編集・発行 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室

